

Animal Welfare Book

人も動物も 満たされて生きる



人も動物も満たされて生きる

さっぽろ自由学校「遊」



NPO 法人 さっぽろ自由学校「遊」
アニマルウェルフェア研究会

もくじ

はじめに

1. 「家畜福祉」をめぐる歴史といま

・はじめに	3
・「アニマルウェルフェア」って何だろう	4
・日本の「人と動物の関係史」をたどる	6
・工場型畜産を問う『アニマル・マシーン』	9
・採卵鶏の「ケージフリー」は世界の潮流	11
・日本の鶏と豚をめぐる過酷な環境	14
・持続可能な酪農とアニマルウェルフェア	16
・「山地酪農」という生き方	18
・牛とともに働くなかで思うこと	20
・肉用牛の海上輸送をめぐる問題点	22

2. 北海道のアニマルウェルフェア実践農場を訪ねて

・ありがとう牧場（足寄町）	26
・小林農園（厚真町）	28
・高橋牧場（別海町）	30
・十勝しんむら牧場（上士幌町）	32
・The 北海道ファーム（栗山町）	34

3. 畜産動物以外のウェルフェア

・伴侶動物と畜産動物の架け橋に	36
・実験動物のウェルフェアをめぐる課題	40
・動物実験の闇に迫る渾身の一冊	43
・展示動物のウェルフェアをめぐる	44
・絶滅の危機にある野生動物との共生	48

4. 読書案内

5. 「遊」アニマルウェルフェア関連講座の軌跡

動物の飼育環境の向上をめざす国際基準に関わる鶏卵汚職事件をきっかけに、「アニマルウェルフェア（Animal Welfare・動物福祉）」という言葉をよく聞くようになりました。これは、もともと欧州発の考え方で、「揺りかごから墓場まで、それぞれの動物がストレスから自由で、健康的に生きること」を意味します。1960年代の英国人ジャーナリストによる「工場型畜産」への告発をきっかけに、半世紀あまりかけて世界中に広がったものです。

日本では、一部の研究者や畜産関係者、動物保護団体のメンバーらが20年ほど前から普及活動などを進めてきましたが、残念ながら市民レベルに至るまでは浸透していません。

そんな状況に一石を投じようと、さっぽろ自由学校「遊」では、2019年10月からアニマルウェルフェアの連続講座を始めました。3年半にわたり、「人も動物も満たされて生きる」「人と動物との共存・共生をめざして」をテーマに講座を継続。現場がかかえる課題から学びつつ、両者のより良い関係を創る道筋を探っています。

この小冊子は、運営スタッフや受講者が動物福祉をめぐる「歴史と今」を紹介する一方、実践農場のレポートや畜産動物以外のウェルフェアなどについて、分かりやすくまとめました。各分野に関係する皆さん、とりわけ畜産のあり方や動物保護、生態系の保全などに関心をもつ若い世代に読んでほしい、と願うものです。

NPO法人さっぽろ自由学校「遊」アニマルウェルフェア研究会
（コーディネーター・滝川 康治）

「アニマルウェルフェア」って何だろう



人も動物も満たされて生きる

多くの人にとって馴染みの薄いアニマルウェルフェア（Animal Welfare = AWと略）という言葉は、日本語では「動物福祉」や「家畜福祉」と訳されてきました。「（人間も動物も）満たされて（wel）生きている（fare）」が語源になっており、次のように定義できます。

「それぞれの動物の習性や生態、生理を理解し、誕生から最終的な死を迎えるまでの過程において、ストレスから自由で、行動要求を満たされた健康的な生活ができる状態にあること」

AWの基本は「動物の習性・生態・生理」によく学ぶことに尽きます。

例えば、牛は草や木の葉などを食べ、微生物の力を借りて巨大な第1胃（ルーメン）で発酵させ、その栄養分を吸収して生きる動物です。「牛は牛らしく」という言葉がありますが、草食獣に大量の穀物を与えることは、本来の生理や生態を蔑ろにします。

鶏は、地面を突ついて餌をついばみ、砂浴びをして体の汚れを取り除き、暗くなると高い木に止まって休む動物です。ケージに収容したり、狭い鶏舎に閉じ込めて急速に太らせることは、A

Wの基本に反します。

- ①飢えと渇きからの自由（解放）
- ②肉体的苦痛と不快からの自由（解放）
- ③外傷や疾病からの自由（解放）
- ④恐怖や不安からの自由（解放）
- ⑤正常な行動を表現する自由

アニマルウェルフェアは当初、畜産動物が対象でした。しかし、今では人間の管理下にある畜産動物や伴侶動物（ペット）、動物園などの展示動物、実験動物、野生動物に対し、「5つの自由」を保障することは国際的な原則になっています。

告発を受け、英国の委員会が勧告

この国際原則が確立される、1990年代までの経緯を紹介しましょう。

第1回東京オリンピックが開催された1964年、英国人のジャーナリスト、ルース・ハリソンは工場畜産の残虐性を告発する『アニマル・マシーン』を出版し、大きな反響を呼びました（別項を参照）。

英国議会の動きはすばやく、動物学者のロジャー・ブランベル（ノースウェールズ大学教授）を委員長とする、「集約畜産下での家畜のウェルフェアに関する専門委員会」を設けて畜産分

野での虐待性を検討させ、飼育方法のあり方を諮問しました。同委員会は翌年、次のような家畜飼養に関する基本理念を勧告しています。

「どんな条件の下であろうと、家畜は少なくとも楽に向きを変え、自分で毛並みをそろえることができ、起き上がり、横たわり、四肢を伸ばせる — という、動作における『5つの自由』を保障されるべきである」

英国政府は続いて、1968年に制定した農業法の中で、家畜の虐待防止のための条項を定めています。この動きは西欧全体に広がり、欧州審議会は70年代までに畜産動物の国際輸送や屠殺などに関する協定を創りました。

こうして、『アニマル・マシーン』の出版から30年ほどの歳月をかけて、欧州でのAW関連の法令づくりが進んでいったのです。

家畜は感受性のある生命存在

1997年、EU（欧州連合）の憲法にあたるアムステルダム条約で、アニマルウェルフェアについて特別な法的拘束力を持つ、「動物の保護および福祉に関する議定書」が発効しました。

「家畜は単なる農畜産物ではなく、感受性のある生命存在（Sentient Beings）である」

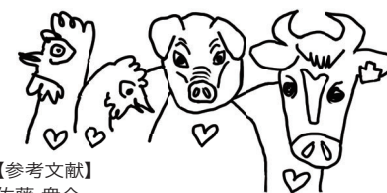
という目標を明確に定義。動物の生理・行動的な要求を尊重し、ストレス

を減らすための努力を、加盟国と市民に課したのです。

2009年には、リスボン条約第13条に「アニマルウェルフェア」が規定されています。OIE（世界動物保健機構、旧名・国際獣疫事務局）や世界獣医学協会の「指針」や「基本方針」の中にも盛り込まれました。

これらの動きを受けEUでは、2012年から採卵鶏の従来型バッテリーケージ飼育、翌年には母豚のストール飼育（出産前後の一時期を除く）を、それぞれ禁止することを決定しました。アメリカでも近年、採卵鶏のケージ飼育を禁止する州が現れるなど、AWを推進する流れが強まっています。

日本では、アニマルウェルフェアに対する認知度はまだ低く、関連法令の整備もこれからです。しかし、長い歴史をもつ、動物の生命を慈しむ精神性は残っており、人と動物が満たされて生きる社会、が実現する日は、そう遠くないでしょう。（滝川 康治）



【参考文献】
佐藤 衆介
『アニマルウェルフェア』
（東京大学出版会・2005年）

松本 洋一編著
『日本と世界のアニマルウェルフェア畜産（上・下巻）』

（養賢堂・2016、2018年）

日本の「人と動物の関係史」をたどる



肉食は避け、生命を慈しむ

アニマルウェルフェア（AW）に関連する法令整備の一方で、貿易戦略の一環にも位置づけAW畜産への転換を進めるEU。国民の認知度は低く、モデルとなる先進事例も少ない日本——その落差は大きいものがあります。

しかし、意外なことに日本は長い間、動物たちの生命を慈しむ、アニマルウェルフェアの先進国だったのです。

西暦701年に始まる律令時代から明治初期に至る12世紀もの間、肉食（野生鳥獣を除く）や牛馬の屠殺禁止、放生（注＝人々が功德を積むために生きものを逃がしてやること）の奨励など、欧米とは異なる動物に対する倫理感が尊重されてきました。

その根底には、自然界すべてが仏性を持つとする「山川草木みな成仏」の思想や、仏教による「不殺生戒」の教えがありました。また、こうした仏教思想が神道の「穢れ観」に反映し、肉食をタブー視する食文化がつくられていったわけです。（注1）

欧米と遜色のない法令も

江戸幕府の第5代将軍・徳川綱吉は、1685（貞享2）年、犬の保護や捨て子・

捨て牛馬、鷹狩りの禁止などを盛った「生類憐れみの令」を策定しました。

同じころ、植民地時代の米国マサチューセッツ州では、「自由のコード」という法典が制定されています（1641年）。近代世界で初めて動物福祉にも目を向けた法典で、「人間に保管されている生きものに対する虐待行為を禁止する」旨を明記。移動や運搬に利用する家畜に対し、一定の休憩や休息を与えることを義務化しました（注2）。

英国では、近代で2番目の動物福祉法として、1822年に「残酷で不適切な牛の扱いを防止するための法律」（マーチン法）が成立。その2年後に



北海道の農村に建立された動物を慈しむ碑

日本の殺生禁止・肉食禁止令の歴史（古代～中世～近世～近代～現代）

古代	日本書紀・古事記	675年	肉食禁止令（天武天皇）	牛・馬・犬・猿・鶏5種類の4月から9月末までの食肉禁止（稲作期間の牛馬耕の推進を念頭） 主要な狩猟獣の鹿と猪の食肉は除外 大化の改新による中央集権国家の大乗仏教による祭祀
		691年	肉食禁止令（持統天皇）	宮中での肉食を禁止
		722年	殺生禁断令 放生（放鳥獸）（元正天皇）	路上に散乱する骨や肉を埋めること。 飲酒と屠殺を禁ずる。
		730年	殺生禁断令（聖武天皇）	鹿猪の捕獲と殺生を禁止
		737年	牛馬のと殺禁止（聖武天皇）	飲酒と肉食の禁止
		741年	牛馬の殺生禁断令（聖武天皇）	農耕用の牛馬のと殺の禁止
		743年	殺生禁断令（聖武天皇）	49日間殺生を禁断し、肉魚が混じった雑食を禁止する
		749年	肉食禁止令（聖武天皇）	全国に殺生の禁断を命じる
		752年	殺生禁断令（孝謙天皇、聖武天皇の娘）	魚をとることも禁止。漁民へは米配給
		758年	殺生禁止令（孝謙天皇）	天皇への鹿・猪肉の献上を永久に禁止
		759年	殺生禁止令（淳仁天皇）	むやみな殺生を慎むこと
		764年	殺生禁止令（孝謙天皇）	鷹・犬・鶴を使用する狩猟と漁獵を禁止する
		766年	殺生禁止令（称徳天皇）	狩猟漁獲のための鷹・犬、鶴の飼育禁止 肉、魚の献納禁止
		770年	肉食禁止令（称徳天皇）	7日、全国で辛しの入った肉・酒を禁止
中世	平安・鎌倉時代	775年	殺生禁止令（光仁天皇）	天皇誕生日10月13日はと殺を禁止
		791年	殺生禁止令（桓武天皇）	牛を殺して漢神を祀ることを禁止
		801年	殺生禁止令（桓武天皇）	寺の周囲二里以内の殺生を禁止
		812年	殺生禁止令（嵯峨天皇）	寺の周囲二里以内の殺生を禁止
		841年	放生令（任明天皇）	寺の周囲二里以内の殺生を禁止
		881年	放生令（陽成天皇）	全国に放生池が造られた。
		927年	物忌令「延期式」成立（醍醐天皇）	肉食の「けがれ意識」の規定 六畜（馬、牛、羊、犬、豚、鶏）を食したものは3日間もの忌み（飲食行いを慎み、身を清めること）。鹿は除外。
		1114年	鳥類飼育禁止（白河天皇）	小鳥・鷹を京都で飼育を禁止
		1127年	天下殺生の禁止（崇徳天皇）	魚網の放棄、放鳥
		1130年	狩猟禁止（崇徳天皇）	
		1188年	諸国殺生禁断（後鳥羽天皇）	
		1191年	殺生禁止令（後鳥羽天皇）	寺の周囲二里以内の殺生を禁止
		1195年	鷹狩り停止（源頼朝）	
		1212年	鷹狩り禁止（源頼朝）	
近世	室町・安土桃山・江戸（徳川）時代	1231年	殺生禁止（後堀河天皇）	寺の周囲二里以内の殺生を禁止
		1261年	殺生禁止（宗尊親王）	毎月8,14,15,23,29,30の6日間、彼岸の期間は殺生禁止
		1587年	キリスト教禁止令 牛馬と殺禁止令（豊臣秀吉）	キリスト教宣教師ザビエル等が牛肉食の西欧食文化を広めたことから、徳川幕府は反肉食政策をとった。
		1612年	牛馬食肉禁止（徳川秀忠） 自然死牛馬の売買禁止	
		1685年	生類憐れみの令（徳川綱吉）	犬の保護、捨て子・捨て牛馬の禁止 鷹狩り禁止
近代	明治・大正時代	1871年	宮中の肉食禁止令の解除（明治政府）	米の祭祀を司る天皇の宮中料理における肉食禁止令の廃止→西洋化
		1918年	鳥獣保護及び狩猟に関する法律（大正政府）	
現代	昭和・平成・令和時代	1972年	動物の保護及び管理に関する法律制定（国会議員立法）	
		1999年	動物の愛護及び管理に関する法律に名称変更	

編集引用資料

- 1) 原田信男『歴史の中の米と肉—食物と天皇・差別』平凡社選書147 1993年
- 2) 若尾政希「食から文化を考える—日本史研究への招待」—橋大学機関リポジトリ2013
- 3) 若尾政希「お肉のスヌー—肉食禁忌と食の文明開化—」平成25年度 一橋大学付属図書館企画展示
- 4) 地球生物学会ALIVE「日本における主な動物保護法制の歴史」 <http://www.alive-net.net/law/wadai/law-history.html>
- 5) 秋田昌美「肉食禁止の歴史」<http://merzbow.net/cruelty-free-life/10/>

（作成：松木 洋一）

は、世界最古の動物保護団体として、「動物虐待防止協会」(英国王立動物虐待防止協会〔RSPCA〕の前身)が設立されています。

こうした歴史を対比してみると、日本は世界の中でも先駆的な動物保護政策を進めた国、といえるでしょう。

米国の食料戦略に翻弄されて

日本では長い間、牛や馬は荷物の運搬や田畑の耕作などのための役畜であり、肉や乳を得るための畜産動物(家畜)ではありませんでした。

大きく変わるのは、1871(明治4)年に宮中に対する肉食禁止令が解除されてからです。しかし、「豊葦原瑞穂^{とよあしはらみずほ}の国」と呼ばれるほど稲作が盛んなだけに、肉食は庶民まで普及しません。畜産業は小規模にとどまり、やがて戦争と食料難の時代を迎えます。

第2次世界大戦後に日本を占領したアメリカは、日本人の食生活を無理やり変えさせながら、米国産農産物の大消費地にしようとしてしました。

小麦を売るために、科学的根拠の乏しい「米を食べるとバカになる」と宣伝するなど情報を操作し、脱脂粉乳の学校給食と併せてパン食や肉・乳食を奨励。そして、米国産の穀物(トウモロコシや大豆など)を家畜の飼料にする食料戦略を進めたのです。

そんな中で、身近な粗飼料で家畜を

飼い、米や野菜などを作って暮らす有畜複合型の農業が変容していきます。

敗戦後の高度経済成長が始まると、鶏→豚→牛の順に、外国産の穀物など濃厚飼料に依存した飼育方法が主流に――動物たちの健康や福祉は蔑ろにされ、卵や肉、生乳の「製造マシーン」の風潮が強まり、現在に至ります。

この半世紀あまり「工場型畜産」に席卷された日本列島ですが、1200年間にわたり受け継がれてきた、牛馬を慈しむ精神風土は残っています。

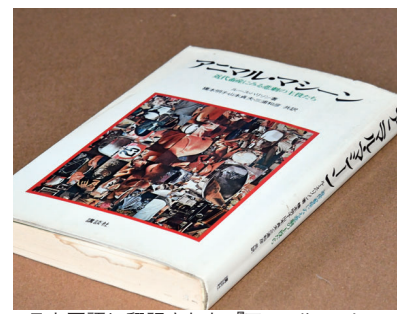
岩手には「南部曲がり家」という家で農民と馬が共に暮らした歴史があり、建物が保存されています。

全国各地の牧場や農村地帯では、「獣魂碑」や「畜魂碑」「馬頭観世音の碑」などを見かけます。牛馬に対する慈しみや、死を悼む気持ちを表すために建立されたもので、碑に向かって手を合わせる人たちもいます。かつてのAW先進国の精神風土は、今も失われていません。(滝川 康治)

(注1) 松木洋一「日本のアニマルウェルフェア畜産の現状と展開方向」(AWFCJ国際シンポジウム原稿・2019年)

(注2) 上原まほ「グローバル食品企業チェーンにおけるFAW養鶏ビジネス」(『畜産の研究』第73巻 第3号・2019年)

工場型畜産を問う『アニマル・マシーン』



7カ国語に翻訳された『アニマル・マシーン』
(日本では絶版)

現場を訪ね劣悪な環境を記録

動物福祉に関する「5つの自由」が誕生する原点になった、『アニマル・マシーン』について紹介しましょう。

著者ルース・ハリソン〔1920―2000年〕は、作家と芸術家の娘として英国ロンドンで誕生しました。クエーカー教徒の彼女は、第2次世界大戦中には避難民の救援ボランティアとして活動。戦後になると、有機農業団体や自然保護協会の理事なども務めています。

この本が書かれた1960年代前半の英国は、畜産の工業化が進んでいた時代でした。著者は、採卵鶏やブロイラー、肉用牛、豚などの「家畜工場」を訪ね歩き、関係者から取材するとともに、業界誌などを丹念に読み込みます。

こうして見聞した実態を記述する

一方、食べものと健康、動物虐待と法規制についても言及。全10章のうち3章を鶏関係の記述にあて、生産現場の劣悪な環境を浮き彫りにしています。以下は第1章に記されたコメントです。

「畜産動物の生命それ自体が安価になっているために、生命が粗末に扱われている。どんな種類の動物であれ、その生命が安く手に入るのだと考えることは危険である。そうした考えを認めるなら、それに続く世代はより粗末に扱うだろうし、そしてまた次の世代



有機農業団体でも活躍したルース・ハリソン
(写真: fotokiddie.blogspot.com/
2019/10/blog-post.html)

は……ということになるであろう」
「工業的畜産の経営者とその業界は、利益があがっているかぎり、自分がしている残虐行為を認めようとしない。動物関係の法律は、目があらく、輪郭がはっきりしないうえ、さらに人の望みを絶つほどに時代遅れである」

レーチェル・カーソンが序文

本書の初版が刊行されると、英国の大手紙『ガーディアン』は、「実に鋭い疑問を投げかけており、また安易にそれに対する解答を引き出せるほどデータがそろっているわけでもないことも、よく理解させてくれる」

と好意的に報道。他の紙誌も「告発の書」「ハリソン夫人の挑戦に対してぼんやりしては、とんでもない間違いのもとになる」などと評しました。

彼女の問題提起は政府を動かし、ブランベル委員会の設立に至ります。自身も同委員会の一員として活躍し、欧州や米国の専門家会議などで発言を継続。『ファクトリー・ファームینگ（工

業的農業）』『動物・人間・倫理』などの共著書もあります。

農業に使われる化学物質の危険性を指摘した、『沈黙の春』の著者で生物学者のレーチェル・カーソン（1907 - 1964 年）は、本書に序文を寄せました。

「現代の工場は、人工的で破壊的な設備の下で動いているわけだが、そのやり方をもってきて健康な動物を生産しようとしても、それは無理というものである。そんな所で育てれば、動物は育つはしから生命のない物体同然になっていく（中略）。私は、ルース・ハリソンの問題提起を歓迎する。彼女はこう問いかけている。『人間以外の他の生命を支配する場合、どれほどの権利が人間にあるのか』（中略）『さらに、残虐をほしいままにしたやり方で、この不幸な生命を絶ってしまふ権利があるのか』と。私自身の答えは、絶対にノーである」

太陽の下で緑の野原を自由に行動する権利を剥奪し、動物が自然にそなえている本能を抑圧する——と工場畜産の矛盾を告発し、現在のアニマルウェルフェア推進の礎になったルース・ハリソンの営み。本書は7カ国語に翻訳され、多くの人に関心を広げました。

1979年に邦訳が講談社から出版されましたが、現在は絶版になっており、復刻版の刊行が待たれます。

採卵鶏の「ケージフリー」は世界の潮流



先鞭をつけたEUの取り組み

日本の採卵鶏の飼育方法は、狭い空間に鶏を収容するバタリーケージによる飼育が約95%（別項を参照）を占めており、「脱ケージ」が進む世界の潮流から取り残されています。

EU（欧州連合）は、2012年から採卵鶏のケージ飼育を禁止する方針を決定しました。IEC（国際鶏卵委員会）の調査によると、2022年にはスイスやオーストリア、オランダ、スウェーデン、デンマークの6カ国で87～100%のケージフリー化を実現。ここ5年間ほどのフランスの急伸が目を引き、下位の東欧諸国やスペインでも20%になるなど、着実に「脱ケージ」が進行中です。

EUの加盟国以外に目を転じると、日本よりケージ飼育の比率が高い国は、メキシコや中国、インドなど数カ国しかありません（注1・13ページの表）。

欧州では今、「End the Cage Age（檻の時代を終わらせよう）」をスローガンにした市民運動が広がっています。こうした動きを受け、EU委員会は採卵鶏や繁殖豚のケージ飼育を2027年までに廃止する動きを加速。23年中

アメリカ国内の店頭で並ぶケージフリー卵
（2020年、大木茂氏撮影）

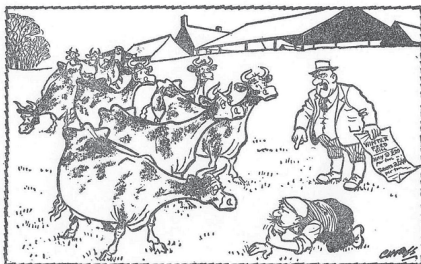
に、ケージ廃止に向けた法律案を提出することを決めています。

州法で「禁止」へ進むアメリカ

欧州を追いかける形で「脱ケージ」を急いでいるのがアメリカです。

2016年にマサチューセッツ州の8割近い住民による賛成を受け、採卵鶏や子牛、繁殖豚を狭い空間で飼育することを禁じる法案が可決され、ケージフリー化に先鞭をつけました。

これに先立ち、2008年に行なわれたカリフォルニア州での住民投票では、「ケージ廃止」賛成派が圧勝しました。しかし、この法律には飼育スペースの面積要件がないなどの問題点があり、2回目の住民投票の結果、2022



挿絵に草の食べ方を忘れた牛を載せて風刺



年から同州内で生産流通される鶏卵は、すべてケージフリーにするよう義務づけられています。

また、ワシントン・オレゴン・ミシガン・コロラド・ネバダ・アリゾナの各州では、ケージ飼育の卵の生産・販売禁止や、飼育面積の拡大などを義務づける法律が制定され、「脱ケージ」の動きが加速しています（注2）。

前出の I E C の調査結果を見ると、2016 年まで 1 桁台だったケージフリーの比率は、右肩上がりで伸びています。「脱ケージ」の目標として掲げる 2025 年が間近にせまる今、スーパーや食品加工業、外食、ホテルなどの需要が拡大中。2021 年の米国鶏卵協会のデータによると、すでに全米の生産に占めるケージフリー卵の割合は 29%（うち有機卵は 7%）に達しました（注3）。

生産情報の開示に動くアジア

アジア圏では平飼い養鶏の詳細な基準をつくる一方で、すべての鶏卵に生

産方法を印字し、購入するかどうかを消費者の判断にゆだねる取り組みが進んでいます。

鶏をめぐるアニマルウェルフェアや鶏卵の生産・消費動向に明るい、麻布大学の木本茂教授の調査によると、中国では 2021 年にケージフリーの基準を策定し、台湾では 22 年からスーパーなどで販売されるすべての鶏卵に、生産方法を番号でスタンプする規則を導入したといえます。韓国でも、鶏卵のすべてに飼養方法を表す印字が義務づけられました。（注4）

国際評価が低い日本の動き

日本の採卵鶏の飼育環境は、『アニマル・マシーン』が書かれた 1960 年代と、大きく変わっていません。

近年、世界の投資家がリスクを回避するため、企業の FAW（Farm Animal Welfare）政策の達成度を検証していますが、日本企業は軒並み低い評価です。世界動物保護協会（WAP）が 2020 年に実施した畜産動物のウェルフェアに対する評価（対象 50 カ国）では、日本は最低の「G」でした。こうした状況を改善するためにも、市民の関心の高まりが欠かせません。

AW の認知度が低い日本ですが、希望が持てる動きもあります。

外資系の一部ホテルでは、使用する鶏卵を 2025 年までに 100% ケージフリー世界の潮流が変わるなか、日本ではケージ飼育が 95% を占める（提供：アニマルライツセンター）

りにすることを決定。国内生協では 2 番目に多い、組合員数 190 万人あまりのコープさっぽろは、2017 年に全店舗で平飼い卵を扱う方針を決め、取り組みを続けています。また、イオンや東急ストア、イトーヨーカ堂などの量販店でも、平飼いの卵を販売するようになりました。

日本の採卵鶏をめぐる「脱ケージ」の動きは、緒についたばかりです。消費者みずからが生産現場の実態をよく知り、ケージフリー卵への転換を流通・販売関係者に促していくことが求められています。（滝川 康治）

表、世界の採卵鶏におけるケージフリー卵の割合
（作成：木本茂、出典：I E C データおよび『鶏鳴新聞』記事）

ケージフリー卵（バーン、フリーレンジ、オーガニックなど）の羽数構成													
	2010.9	2011.9	2012.9	2013.9	2014.9	2015.9	2016.9	2017.9	2018.9	2019.9	2020.9	2021.9	2022.9
スイス	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
オーストリア	96	97	97	97	97	98	98	98	99.16	99.2	99.2	100.0	100.0
ドイツ	62.4	81.8	86	86.8	88.5	89.2	90	90	94	93.3	94.4	94.9	94.5
オランダ	56	56	69	83	93.4	85	84	82	86	89	89	88.0	88.0
スウェーデン	61.4	64.8	66.1	70.3	75	78.4	83.4		87.7	92	93	95.0	97.0
デンマーク	42	38	42	44	45	44	50	59	71	84	87	84.0	87.1
英国	45	50	51.2	51.4	49	48	48.9	50	52	55.8	57.7	59.6	-
ベルギー	-	26	38		38	38		50	60.7	-			
アイルランド	43	42	41	31	43	43	42.5	44	46	47	48.5	49.9	51.5
フィンランド	26	28	35	37	37	37	37	40	38	42	42	49.0	58.0
イタリア	15.5	23	42.5			57	58	38	38.2	45.5	55.3	58.0	64.4
フランス	18	20	27	30	32	32	32	31	35	39	46	56.0	64.0
ポーランド	8	8	8	16	10	12	20	25	30	11.7	-	18.9	23.8
スロバキア	20	15	20	15	15	15	18	19	12	17	21	24.0	25.0
ハンガリー	18	13	27.2	18.17	18.2	18.2	34	14.5	16.29	19.24	-	16.1	20.5
スペイン	3	4.3	3	6	7	7	8	7	12	17	23	22.4	27.0
ポルトガル	3	3	3	3	3	3.5	4	5.5	6.5	9.5	25.5	13.9	25.0
オーストラリア	23	32	32	32	32	35	38	45.49	45.5	45.5	40.0	45.5	52.0
ニュージーランド	12	13.5	14	17	18	18	20	23	30.6	33.6	35.4	44.0	47.0
米国	5	5	6	6	6	6	8.7	11	13.9	16.6	19.6	23.7	27.8
メキシコ												0.39	0.39
アルゼンチン												10.0	8.0
カナダ	4	4	4	4	6	6	8.5	9	11	13	16.0	16.0	17.8
中国	0	10	10	10	10	10	10	10	5	3	2	2.0	2.0
インド												0.0	0.0
韓国												3.96	4.4
日本	1.3	1.3	7	3.8	4.2	4.8	4.9	5	5.1	5.4	5.8	5.9	5.7

（注1）さっぽろ自由学校「遊」講座「『脱ケージ』を軸に鶏と人間の関係を考える」資料（木本茂氏作成・2023年3月）

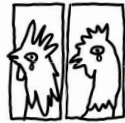
（注2）アニマルライツセンター公式サイト情報：hopeforanimals.org/eggs/usa-cage-free/

（注3）さっぽろ自由学校「遊」AW講座資料（上原まほ「ザ・ヒューメイン・リーグ・ジャパン」リージョナルマネージャー作成・2021年10月）

（注4）木本茂「養鶏における消費者理解の促進とアニマルウェルフェア」（『養鶏の友』2022年2・3月号）



日本の鶏と豚をめぐる過酷な環境



A 4 サイズより狭いケージ

2015年に農林水産省の外郭団体・畜産技術協会が公表した報告書をもとに、畜産動物をめぐる過酷な飼養実態について紹介します。

この報告書は、同協会が業界団体に委託して行なったアンケート調査の結果をまとめたもの。採卵鶏の場合、全国の養鶏場724件に調査票を送り、回答率は55%（398件）でした。

ケージ型の鶏舎において、採卵鶏1羽あたり飼養面積がA 4サイズ（210mm×297mm＝624cm²）より広い農場はほとんどありません。「370cm²以上430cm²未満」の養鶏場が最も多く、すし詰め状態になっています。

1ケージあたり収容数は、2～6羽のところが75%に上り、ケージの高さは「45cm未満」が69%と、鶏にとって、きわめて窮屈な居場所です。

「ケージ内に産卵箱を設置していますか？」との問いに対し、「いいえ」が90%、「はい」は1%にすぎません（残りは無回答）。砂浴び場や止まり木の設置の有無も同様の数字でした。

平飼いの鶏舎でも、砂浴び場は50%、産卵箱や止まり木は20%台の養鶏場が「いいえ（未設置）」と回答しました。ケージ飼いより採卵鶏の自由度は高いものの、飼養環境をさらに改善することが求められます。

また、鶏同士の突つき合いを防ぐことを目的に、くちばしを切るピークトリミング（^{だんし}断喙）については、全体の84%の鶏で行なわれていました。

雌の鶏に餌を与えず産卵を停止させ、人工的に羽毛の抜け換わりを促し、飼育期間を延長させることを「強制換羽（^{かんう}換羽）」といいます。これは、絶食による鶏の衰弱につながる動物虐待の飼育技術です。換羽誘導を行なう農場は全体の66%に上り、うち8割が「絶食法」を採用していました。

密飼いで多発する疾病を放置

肉用鶏（ブロイラー）は、ほぼ100%が平飼い方式ですが、その飼養環境は過酷なものがあります。

狭いケージに収容された採卵鶏
（提供：アニマルライツセンター）

アンケート結果によると、出荷時の1坪（3.3m²）あたり飼養数は、最多が75羽、平均で52.5羽でした（最小は13羽）。最も多く肉用鶏を収容した場合の1羽あたり飼養面積はわずか440cm²。平均値でもA 4サイズほどの広さしかありません。

そこに、坪あたり重量にして150kg（生体の平均）もの鶏が詰め込まれています。また、外傷や疾病の鶏が出た場合、他の鶏と分けて管理するか問うと、「分けていない」との回答が92%を占めました。「感受性を持つ生命存在」ではなく、単なる「食肉製造マシン」として扱われ、鶏の健康や福祉は蔑ろにされているのです。



趾蹼（しせき）皮膚炎（変色部分）を起こしたブロイラーの足

ストール使用が続く養豚業界

世界のアニマルウェルフェアをめぐる潮流は、畜産動物をケージやストー



日本の養豚業界はストール飼いが主流

ル（檻）に閉じ込めずに飼養する方向に進んでいます。

しかし、日本では依然として、経産豚の飼養管理の中で、「ストールを使用する」と答えた農場が89%にも上りました。ストールは幅60cm、長さ2mのものが最も多く、その狭さが際立ちます。肥育豚（肉豚）も同様で、出荷前の1頭あたり飼養面積が畳半分にも満たない農場もありました。

狭い空間に多くの鶏や豚を収容し、外国産の濃厚飼料をたくさん与え、効率優先の技術を使って卵や肉を生産する。そうした現場を知らないマスコミが「卵は物価の優等生」とくり返し報じ、安さに飛びつく消費者がゆがんだ生産構造を支えていく……。

これではアニマルウェルフェアの推進に逆行します。一人ひとりの市民が「動物の拘束」や「濃厚飼料の多給」を前提にした畜産の実態に目を向け、そのあり方を変える努力を積み重ねてほしいものです。（滝川 康治）

北海道から持続可能なAW酪農を



酷使され、短命化する牛たち

日本全体の6割にあたる約83万頭の乳牛が暮らす北海道は、「酪農・畜産王国」と呼ばれてきました。

半世紀前に3万4千戸を数えた酪農家は、今では5千戸台。戸数が減った分を急激な規模拡大でカバーした結果、かつての9倍に相当する、1戸平均で145頭もの乳牛を飼養しています（注1）。大型施設や機械類などの負債や労働時間の増大に悩む酪農家も少なくありません。

そうした中で牛たちは、ミルック製造マシーン、として酷使され、短命化に追い込まれています。

日本の乳牛の大方を占めるホルスタインは、良質の飼料と適切な運動、ストレスの少ない環境で飼養されると、20歳ころまで生きられます。1954年生まれの筆者が少年のころは、7、8

回と出産をくり返し、10数歳まで飼育される牛がたくさんいました。

しかし、今は長く生きることを許されません。乳牛を淘汰した時の産次数を示す「平均除籍産次」は3.2産と少なく、平均5～6歳で屠場などに送られるのです。淘汰の理由は、乳房炎や繁殖障害、肢蹄の故障、第4胃変位などの消化器病といった、高い泌乳量に関係する疾病によるものが多くを占めます。また、現役で働く乳牛の「平均産次数」はより少なく、近年は2.5産前後にすぎません。

ありがとう牧場（26～27ページ）の吉川友二さんは「乳牛の産次数がAWの指標になる」と、こう指摘します。「夏場に放牧するだけで平均産次数は0.5産以上多くなります。コンクリートの上で24時間立たされ、ストレスがある舎飼いに比べ、野山を歩き回る放牧牛は長生きする。本来、牛は草食

動物だから、人間でいうメタボになって早死にします」

濃厚飼料を多給し高い乳量

1頭あたり平均生乳生産量は年間1万kgほど。最高乳量の牛になると2万5千kgにも上り、その短い生涯の中で大量の生産を強要されます（注2）。いかに短期間に搾り取り、用済みにして処分するか——これが現代酪農の多数派を占める過酷な実態です。

別項に生産乳量と濃厚飼料（原材料はトウモロコシや大豆、小麦など）の給与量の推移をまとめました。

草食動物の生理や生態を顧みず、1日平均10kg以上もの濃厚飼料を与えることで高泌乳を実現させた、ゆがんだ生産構造をよく示しています（注＝自給飼料の生産基盤が弱い府県は、この傾向がより顕著）。また、高泌乳牛をつくるために、品種改良（改変）が

くり返され、遺伝子解析によるゲノム評価も行なわれるようになりました。

酪農関係者は「乳牛は経済動物だから」と口にしますが、ミルック製造マシーン、である前に人間と同じ生きものです。ミルック、という言葉が動物虐待の免罪符にはなりません。

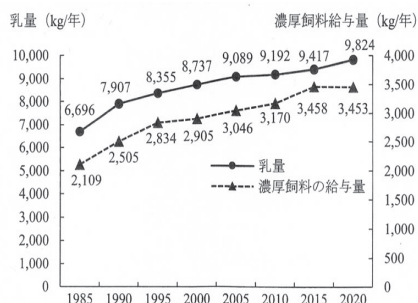
2050年を目標に「5つの提案」

今後、牛乳・乳製品の消費が伸びる要素は乏しく、植物ベースのミルック、製品の開発も進んでいます。「持続可能な農業」を実現させるには、大量生産・消費のシステムから脱却し、風土に生かされた酪農製品を付加価値の高い嗜好品と位置づけていく、価値観の転換も必要です。

これまでの発想を変え、2050年に向けた戦略目標を立て、以下のような取り組みを進めるよう提案します。

（滝川 康治）

- ・穀物の多給によって高泌乳を追求することを止め、少ない乳量で成り立つ「持続可能な酪農」へ転換を図る（牛と酪農関係者の健康維持、環境負荷の軽減にも寄与できる）
- ・持続可能な畜産の実現に向けて「アニマルウェルフェア基本法」を制定する一方、「動物愛護管理法」に基づく規制を強化していく
- ・放牧志向の酪農を重点的に支援する（フリーバーン牛舎やパドックと放牧をセットにした施設の整備など）
- ・放牧やAW、有機畜産への関心が高い若者を対象に「学びの場」を創る
- ・家畜虐待など健全な牧夫精神（ストックマンシップ）を期待できない酪農家の転職を促し、その就労を支援する



北海道の乳牛の305日生乳生産量と濃厚飼料の給与量の関係（乳用牛群検定資料をもとに作成）

（注1）北海道農政部「北海道の酪農・畜産をめぐる情勢」（2022年12月）
（注2）（公社）北海道酪農検定検査協会の牛群検定成績表の数値

「山地酪農」という生き方



先人の教えを守り半世紀

今から半世紀ほど前、植物生態学者の猶原恭爾博士（1908－1987年）は、林地の多い日本の風土に適した農業のあり方として、「山地酪農^{やまち}」を提唱しました。野シバや野草を放牧地の主体草にしなが、林間放牧も取り入れる。糞尿によって土地が肥沃になり、牛を介して生産物（牛乳）が得られる——というのが基本的な考え方です。

親牛と子牛は同じ場所に放牧する。子牛は自生している草の食べ方や周囲の環境を、親牛やまわりの牛から学ぶ。そうした中で、四肢強健で食い込みの良い胃を持った牛が育っていく……。

日本の主流になっている、舍飼いで濃厚飼料を大量に与える酪農とは対照

的な生き方、といえるでしょう。

今、本格的な山地酪農を営む農場は、全国で10戸もありません。岩手県岩泉町の「なかほら牧場」は、そのひとつ。標高700～800mの山あいの傾斜地で、1年を通して昼夜放牧を行ない、自然交配・自然分娩によって健康的な牛を育て、牛乳・乳製品の加工から販売まで手がける経営スタイルを確立しました。研修生も積極的に受け入れ、多くの若者が巣立っています。

創設者の中洞正さん（1952年生まれ）は、学生時代に山地酪農の考え方に出会いました。「草の神様」と呼ばれた猶原博士は当時、1頭あたり年間4,000kg以上の搾乳量を強く戒めており、その教えをずっと守ってきたそうです。中洞さんの著書には、こう書かれています。

「一般的な酪農家にとっていいウシとは、乳をたくさん出すウシである。ホルスタインはそのために改良を加えられた品種だ。1日1頭あたり平均30リットル、なかには100リットルも搾る酪農家もいる。それが可

能なウシが『いいウシ』、ということになる。

それに対し山地酪農では、山で生活できるウシがいいウシだ。乳量は1日10リットル程度の乳を出せばいい。その乳量で農協に出すと採算がとれないが、直販で価格決定権があるから質にもこだわる」



別の親牛の乳を飲む子牛

自然の摂理を尊重して

なかほら牧場で飼われているのは、茶色で小型、足腰が丈夫で傾斜地の放牧に向くジャージー種が中心です。

日本のほとんどの酪農家は人工授精で牛を繁殖させますが、ここでは牛群に種雄牛と一緒に放牧し、自然交配しています。受胎した母牛は、分娩が近づくと群れから離れ、林の中などで出産し、子牛をよく舐めて乾かしてから、搾乳場まで連れてくるそうです。

多くの農場では、分娩後すぐに子牛を母牛から引き離し、初乳を飲んだ後は代用乳（粉ミルク）や発酵乳などで育てます。しかし、なかほら牧場では、厳寒期を除いて母牛のそばで飲みたい

時に乳を飲み、長時間にわたって乳首に吸いつけるのです。「このことにより栄養と行動的欲求を同時に満たすことができる」（中洞さん）

こうして、2カ月ほど自然哺乳をしてから、離乳をするために子牛を牛舎に隔離します。離乳期間（3カ月ほど）には、子牛用の配合飼料ではなく、夏場は青草、冬場は良質の乾草を与えています。

北海道並みの寒さになる山中に真冬でも放牧するという話を聞き、筆者はかつて、「そこまでやると動物虐待になるのでは」と思ったものです。しかし、実際に牧場を訪れ16歳や18歳の牛が元気な姿を目にして、見方を変えました。人間の女性の20～30代に相当する、5歳前後で屠場などに送られる多くの乳牛に比べると、ずっと幸せな生涯ではないか、と。

高泌乳を求めず、自然の摂理を尊重して牛を飼う「山地酪農」の生き方は、動物の習性や生理・生態に適ったAW酪農のモデル事例といえるでしょう。

（滝川 康治）

（参考文献）中洞正 『中洞式山地酪農の教科書』（東海教育研究所・2022年）

※なかほら牧場：

岩手県下閉伊郡岩泉町上有芸水堀287

☎ 050-2018-0110

H P : nakahora-bokujou.jp/



標高700mを超える傾斜地に草地や山林が広がる

牛とともに働くなかで思うこと

菊地 純子（酪農ヘルパー）



「生きた牛を処分」に衝撃

約6年前、私は全く違う業界から畜産の世界に足を踏み入れ、酪農ヘルパーとして様々な牧場を見てきた。

私がこの業界に入って初めに受けた衝撃は、薬を使って治療していた牛が死亡獣畜取扱場（俗称・へい獣処理場）やレンダリング工場（動物性脂肪や肉骨粉の精製工場）まで運ばれるトラックに積まれる光景を目にした時だった。（注＝休薬期間が切れなければ、牛は食用にはできない）

牛はまだ生きていたにも関わらず、足一本だけをロープで吊り上げられ、巨体が宙に浮いている。牛は鳴いていた。トラックの荷台には何頭もの牛が重ねて積まれている。生きているものも、死んでいるものも一緒だ。生きた

ままの子牛を重ねて一緒に積まれていることもあった。

心の痛む光景を見るたびに、「経済動物だから仕方ない。これが当たり前なのだ」と、気持ちを押し込めながら、言い聞かせた。

ある時、他の地域では薬殺（安楽死のこと）してからトラックに積むのだ、と聞いた。私は、そういう方法があるのか、と強く疑問に思った。

2年ほど前から、（私が関わっていた地域では）食用以外の病気などで牧場を出ていく牛は、全て薬殺してトラックに積むように変わった。薬殺は本当に辛いことだけど、運ばれる間の牛の苦痛を考えれば良かったと思う。

しかし、薬殺する獣医さんの負担は特に大きく、できる限りこのような牛を出さないようにすることが大切だ。

「意識して考えない…」が常態化

牛の除角をする時、足や頭をロープで縛り、力づくで押さえつけながら、角の生えてくる部分に焼いて熱くなったコテを押し当て、組織を焼く。「自分だったら…」と考えると耐えがたい。最初はこの作業も、「当たり前なんだ。仕方がない」と諦めて、心を

生きたまま車に積み込まれる牛
（撮影：岡井健獣医師・2016年）

殺しながらやっていた。

しかし、いろんな酪農家に出会う中で、鎮静剤や麻酔を使ったり、牛のストレスを考え、できるだけ若齢のうちに処置する方法があることを知った。そして、「牛も人もしんどいやり方」が当たり前ではない、と思う。（牛と仕事をしていて、私自身は人の安全の面から除角は必要だと考えている）

このように、畜産業界には今まで当たり前に行なわれてきたこととして「特に意識して考えない」、もしくは私が諦めていたように「当たり前だから仕方ない」とされていることが多くあると思う。

動物も人も共に働きたい

外部から入ってきて、さまざまな牧場を見てきた私だから感じるものもたくさんある。人も牛も、お互いが苦痛や負担を感じることはないように、お金をかけずにできることがある。放牧していなくてもやれることがある。

動物の本能や性質を理解し、そこに近づけようとすることは、動物を満たすだけでなく、働く私たちの負担軽減につながることも多い。批判するのではなく、より良い方法が広く浸透するように、家畜に対して

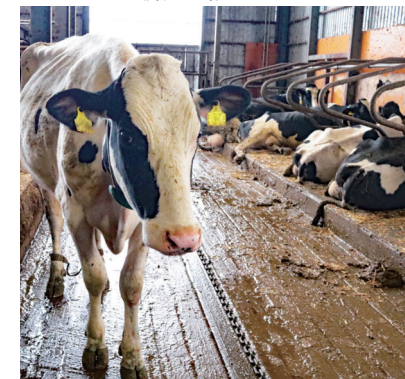


ベッドが狭いつなぎ牛舎の例

優しい気持ちを持つ方が増え、もっと畜産や家畜に関心を持ってもらえるように活動していきたい。

家畜は物ではなく、私たちと同じように痛みや喜びを感じる。動物も人も元気に楽しく働き続けられるように……。アニマルウェルフェアは「動物のため」だけではなく、「働く人のため」でもあると強く思っている。

フリーストール牛舎の中には
脚元が滑りやすいところも…



肉用牛の海上輸送をめぐる問題点

AWに理解が少ない離島の実態

石垣島比屋根牧場
比屋根 恵



私たちが営む「石垣島比屋根牧場」は、繁殖用の肉用牛 95 頭（うち母牛 50 頭、肥育牛 3 頭）を飼養する農家です。12ha の草地のうち 3 ha を放牧場として使い、牛たちは朝と夕方の食事のとき以外はそこで過ごします。

石垣島は那覇から 410km（飛行機で約 1 時間）、人口 5 万人ほどの町です。本土より台湾のほうが近く、亜熱帯性気候のため四季の変化はあまり見られません。

大自然のイメージがありますが、牛を放牧する農場は少なく、出荷の時期まで囲いの中で管理されているところの方が大です。牛たちにとって、高温多湿や台風の襲来など過酷な環境といえます。

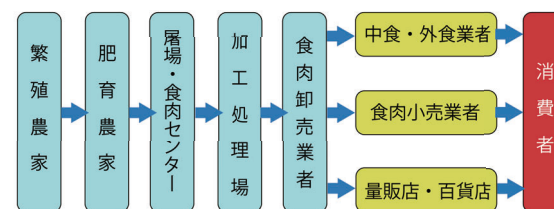
島内の肉牛農家にアニマルウェルフェア（AW）について聞いてみました。認知度が低い上に、「現実的でない」「お金がかかりそう」「わからない、関心がない」「農家の立場もわかってほしい」など否定的な意見が多く残念な結果が出ています。一方で、非農家の方に聞いてみると肯定的な意見が多く、農家との温度差を感じます。AW の概念を正しく理解されていないこともわかってきました。

なかなか普及が進まない理由として、子牛を育てて出荷する繁殖農家は「子牛＝肉（食材）」とイメージしにくいことや、離島はコミュニティが狭く情報量が少ない — などの理由が考えられます。世界的に家畜にたいする考

えが変化する中で、消費者の多様なニーズや時代の流れを捉えにくい環境にあると思います。

牛肉の流通経路は複雑です。私たちのような繁殖農家から肥育農家、食肉センター（屠場）などを経て消費者に届きま

放牧中の比屋根牧場の肉用牛たち



牛肉が食卓に届くまでの流通経路

すが、肉牛農家は消費者のことが想像しにくい構造ができています（図を参照）。直接の顧客になる肥育農家から求められることは、牛の血統や体重、セリにたくさん牛を出荷することであり、AW の向上を求める声はありません。複雑な流通経路が「牛に配慮する」という考え方に壁を作っています。

防疫面からも改善策を急いで！

毎月開催される島の家畜市場には、全国から大勢の購買者が牛を買い付けに訪れ、2 日間で 7 百～8 百頭ほどの子牛が取引されます。

島で生まれた子牛のうち 9 割が、県外に出荷され全国各地の銘柄牛として流通しています。

離島のため、購買先までの輸送には船を使うのですが、まず石垣港から那覇港まで 12 時間。その後、那覇港で荷物の積み下ろし作業があるため、牛たちはそのまま 7 時間、船の中で待機することになります。さらに鹿児島港まで 20 時間にもおよぶ船旅が続くのです。

同港に到着すると、各購買先の農場までトラック輸送が待ち受け、遠いところでは栃木や山形、岩手まで運ばれていきます。石垣島から鹿児島港までは単純計算で 39 時

間。気象や海象、貨物の状況によっては更に延びることもあります。その間、コンテナで運ばれる一部の牛を除き飲み水は一切与えられません。

輸送は単に「牛がかわいそうだ」というのではなく、防疫上問題であるうえ、甚大な経済被害が生じる深刻な問題です。



足元が糞尿でぬかる状態で輸送

関係機関の協力により少しずつ改善してきたものの、十分とは言えず、牛を収容する汚れた輸送コンテナの使い回しは、さまざまなウイルスや細菌も離島に運んでくる可能性があります。

万が一、法定伝染病の口蹄疫が発症すると、取り返しのつかない大変な事態を引き起こすでしょう。1頭でも口蹄疫が発生すると、法律によって、島内で飼養するすべての牛を殺処分しなければなりません。農家は職を失い、島の経済は崩壊してしまいます。

コンテナに蓄積した糞尿をきれいに取り除き、消毒をする、といった基本的な作業が牛と島の暮らしを守ることにつながります。



肉牛の海上輸送に使うコンテナ

かつて海上輸送中に牛と豚の大量死亡事故が起きました。換気不足と暑さによる酸素欠乏や熱中症が原因でした。家畜を安全に運ぶという配慮に欠けた人災といっても過言ではありません。この惨事を二度と繰り返さないためにも、早急に緊急時のガイドラインやマニュアルを作り、本格的な対策を立ててほしい、と考えています。

そして、長時間の輸送にも耐えられる丈夫な子牛を育てることが私たち繁



寿司詰めで陸上輸送される肉牛

殖農家の責務だと思っています。

畜産が離島の経済を支える基幹産業になっているため、牛たちの輸送をやめてしまうことはできません。

輸送中の牛の消耗を減らすために、暑熱対策や飲み水の提供、清潔な収容、出航時刻に合わせた運用を行なうなどアニマルウェルフェアに対する最大限の配慮が必要です。

今後も安定的に畜産が発展していくためには、輸送に携わる関係者全てが、その重要性を理解し、実施に向けて連携することが不可欠だと考えています。

ひとりでも多くの方がこの現状に関心を持ってくださり、1日も早く改善されることを願ってやみません。

※石垣島比屋根牧場

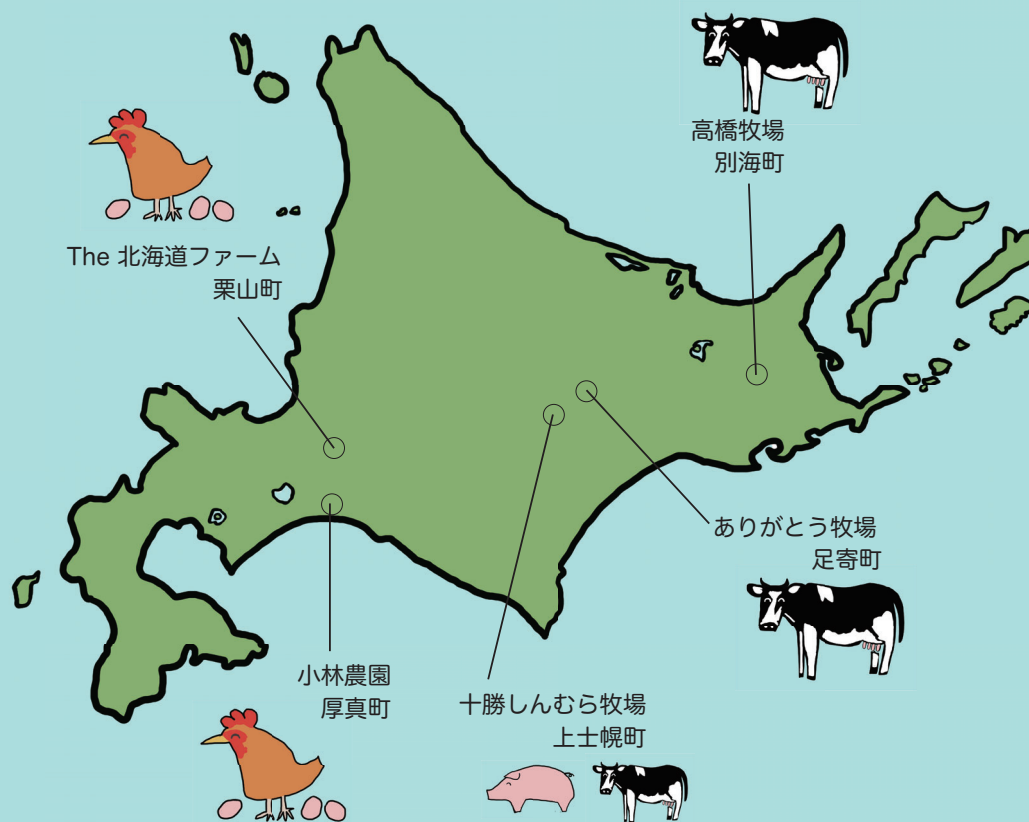
沖縄県石垣市登野城 1660

☎ 0980-82-6006

YouTube「牛のきもち」

www.youtube.com/@ushikimo

北海道の アニマルウェルフェア 実践農場を訪ねて



シンプルな放牧で高い生産性

足寄町・ありがとう牧場



アニマルウェルフェア向上への近道は放牧に取り組むこと。「ありがとう牧場」は、家畜と接するときの規範や心構えを意味する、「ストックマンシップ」に沿って酪農を続けています。

ニュージーランドで学び就農へ

足寄町は酪農が盛んな十勝管内にある、人口約7千人の小さな町です。「ありがとう牧場」オーナーの吉川友二さんは、北海道大学を卒業後、道内で有機農業を学ぶのですが、そのころから草食動物である牛に配合飼料を与えることに疑問を持っていました。

のちにニュージーランドへ渡り、現場を中心に放牧を学び、最終的には現地で牧場経営を担うファームマネージャーとして採用されました。そんな中で、酪農家にとっても、放牧することで時間と経済的余裕が生まれると実感したそうです。



「放牧によって日本の酪農を変えられるのではないか」という気持ちが高まり帰国。2000年から完全放牧で牛を育て、生計を立てています。

牧場の敷地は90ha（うち草地70ha）。ご家族と2名ほどのスタッフで約110頭（うち経産牛60頭ほど）の乳牛を飼育中です。2月～4月に生まれた子牛たちは、40日間ほどで離乳。成牛と同じように自由に牧草を食べていました。

牛の力で荒れ地を変える

牛たちはとても人懐こく、手を差し伸べると寄ってきて、すり寄ったり、あちこち匂いを嗅いで舐めてくる子もいました。吉川さん曰く、牛たちの成長過程の中で性格も変化していくそうです。子牛の時は人懐こく、思春期の頃にはいったん人間と距離を置くようになり、成牛になると再び人懐こくなる、といいます。

乾物量にして一日に20kgもの草を食べる動物のため、牛たちが同じ草地で食べ続けてしまうと、あっという間になくなってしまいます。

そのため、草地には電気牧柵を設置し、日によって行動できる場所を変えながら行動範囲を制限するのですが、

真冬も外でたくましく生きる牛たち

一度感電した牛たちは柵に近づかなくなります。そこで吉川さんは、一度牛たちが学んだ後の柵には通電していません。

広大な牧場も元々は急傾斜の湿地や荒地でした。藪なども多く、最初は人が草刈機を使って刈っていたそうです。そこに育成牛を放すと草は自然に倒れ、牧草の種を撒いたら牛たちの力で自然と牧草地になっていきました。「荒れた土地が放牧によって草地化するのを見て、放牧の凄さを日々体感しました」と吉川さんは振り返ります。



夏の牧場風景

豊かな農村生活を実現

搾乳は一日に2回。牛たちは自分たちの脚で歩いて牧草地から搾乳場（ミルクパーラー）へ向かいます。行列を作る順番も牛社会が反映されており、先頭は立場の弱い牛、中間が一番強い牛、行列の最後は人間を怖がらないマイペースな牛……。道中で言葉通り「道草を食いながら」パーラーへ向かう牛たちは、とても伸び伸びと気持ちよさそうでした。



搾乳に向かう牛たち

ニュージーランド方式のパーラーでは、牛たちが搾乳を受けます。中央に垂れ下がっているミルクパーラーで両サイドの牛の搾乳ができます。この方式を採用したおかげで、今まで2時間掛かっていた搾乳が半分の時間で可能になったそうです。搾乳が終わった牛たちは、誘導されることなく、また牧草地へ帰っていきます。

「ありがとう牧場」では、牧草が最も生育する夏季に全体の9割の生乳を搾れるように、季節分娩をさせて飼料費を抑え、冬季には飼い主自身の余裕を生むことを可能にしました。

吉川さんの元で放牧を学び、酪農家として独立したり、チーズ製造など6次産業化で生計を立てる若い卒業生も多数います。シンプルな放牧で高い生産性と豊かな農村生活を実現させることを、吉川さんは身をもって教えてくれました。（瀬川 綾子）

※ありがとう牧場

足寄町茂喜登牛98-4

電話：0156-26-2082

H P <http://arifarm.net/>

「自由に人も鶏も楽しい農業」をめざす

厚真町・小林農園



苫小牧市に隣接し、太平洋にほど近い小林農園。小規模な農場が多いケージフリー養鶏家の中で、平飼いと放牧で約7,000羽の採卵鶏（銘柄：ボリスブラウン）を飼育する、日本でも屈指のAW実践農場です。

農場主の小林廉さんは1983年生まれ、若手養鶏家。札幌の養鶏場で研修後、厚真町の山奥に移り住み、10年前に200羽の養鶏を始めました。

2018年9月の胆振東部地震で被災して閉園を余儀なくされましたが、心機一転、3カ月後には現在地に移転して農場を再建。2020年に法人化し、翌年には直営の食堂＆直売所「FORT by THE COAST」もオープン。15人の従業員とともに、生産から販売までの一貫経営に奔走しています。

坪あたり8羽の広さを実現

700羽を飼育するハウス型鶏舎が10棟、うち2棟は有機畜産物のJAS認証を取得しました。雌20羽に対して1羽の雄が同居し、有精卵を提供。慣行飼育と有機の違いは飼料だけで、ほかは全く同じ。5月末から4カ月間、鶏舎と放牧スペースを自由に行き来できるようにしました。

1坪あたり飼育数は8羽で、放牧時は5羽ほどになるといいます。

「私がお手本にしてきた中島正さんの著書『自然卵養鶏法』では坪あたり10羽を推奨していますが、それでも鶏の糞が悪臭の原因になることがある。床を乾燥・発酵させるには、飼育密度はより低いほうがいい。鶏舎の広さ・採光・換気をきちんと行なうと、

良好な飼育環境が実現できます。1羽あたりスペースがうちより広い養鶏場はあまりないでしょう」（小林さん）

鶏舎に足を踏み入れても、不快な臭いはありません。鶏たちは、自由に餌をついばみ、水を飲み、止まり木で休み、床面を

突つき、砂浴びをする……。ここでは、生きものの本来の姿を目にすることができます。

本能や習性を理解して飼育

100～120日齢の若鶏を導入して540日齢（1.5歳）まで飼育しますが、抗生物質は投与していません（ワクチンは接種する）。

AW先進国の多くは、鶏同士の突つき合いを防ぐことを目的に、くちばしを切除するデビーキング（断喙）を禁止する流れが強まっています。

「孵化場では生後10日以内にレーザーを使って（断喙を）やっていますが、うちに来てからは基本的にしません。突つきの原因として、群れの気性やストレス、西日が差すなどの要因を考え、日常の管理の中でそれらを除去するようにしています」（小林さん）

鶏の本能や習性を理解する中で、人間がやるべきことを行なうわけです。

700羽を一群として、移動式の止まり木を10ユニット、32室の産卵箱を設置。餌箱やネットなど一部の資材は、ケージ飼育のものを転用するなど工夫も凝らしていました。

7,000羽の平飼養鶏では、きめ細かな対応が求められます。小林さんは、「飼育環境や卵の品質などはマニュアルで管理できません。鶏に興味を持って飼育するスタッフの育成が大事。そ



5月末から4カ月間、鶏舎と外を自由に行き来できる

れができて初めて、現在の規模が保てる」と強調していました。

道産飼料にこだわり、緑餌も

鶏の本能として、青草などの緑餌を好みます。そこで夏場は毎日、鶏舎まわりなどの草を刈り取って給与。冬場は酪農家からサイレージ（発酵飼料）を購入して与えます。緑餌の有無は鶏のストレスも左右するのです。

飼料のほとんどは北海道産の規格外小麦や米ぬか、魚粉など。有機飼育の鶏には認証を受けた飼料を与えますが、飼育環境は全く同じです。有機卵は「認証された卵がほしい」と希望する取引先だけに出荷しています。

AWの基本を守り、新たな境地を開いてきた小林農園。今後、オーガニック養鶏の分野を拡大することが目標の一つといえます。（滝川 康治）

※小林農園（テンアール㈱）

北海道厚真町浜厚真 467-1

☎ 0145-28-2726

H P <https://kobatama.com/>



代表の小林廉さんは、2013年に厚真町に移住。震災を乗り越え7,000羽の平飼養鶏を実現。（右上）床には火山灰を入れ、「砂浴び」が大好きな鶏たちがくつろぐ

牛とともに「アニマルウェルフェア+放牧」

別海町・高橋牧場



酪農が基幹産業になっている北海道東部の別海町。畑作などを経て、60年代から本格的な酪農を営む高橋牧場では、75haの広い草地で73頭（うち搾乳牛43頭）という適正規模のもとで、濃厚飼料を抑え、牛とともに生きる酪農を続けています。

1頭ずつ名前を呼ぶ

1931（昭和6）年に福島県から入植した先々代が、4年後に1頭の牛を導入したのが始まり。3代目の高橋正明さん（1979年生まれ）は、26歳の時にUターン就農しました。

ここでは、ホルスタインを中心に、ブラウンスイスやジャージーなどを飼育。「牛は（人間の）囚人じゃない」と考え、番号ではなく、1頭ずつ名前を呼んでいます。

5月中旬から半年間、牛たちを昼夜放牧し、搾乳牛と生後6カ月以上の育成牛は同じ群れで生活。冬場も午前8

時から午後3時ころまで外で過ごします（悪天の時は牛舎へ）。人なつこい牛が



耳標に書かれた牛の名前

多く、みずからすり寄ってくる姿が印象的でした。

高橋さんは5年前、30代から50代までの6人の仲間たちと、次のような理念を掲げる「放牧酪農家の考える食と生命の会」を設立しています。

- ・生きものがみんな幸せに
- ・競争ではなく、みんなが幸せに
- ・搾取されず、搾取しすぎない農業
- ・食の安全性を再考する農業生産者
- ・健康になれる牛乳・牛肉の生産
- ・土壌を健康に保つ（農薬や除草剤の不使用）

これらをもとに会員と消費者らがつながり、ドキュメンタリー作品の上映会などを通して、さまざまな放牧のスタイルを伝えてきました。

「Non-GMO プロジェクト」も実践

乳牛の主食は草類など繊維質を多く含む粗飼料ですが、大方の酪農家はタンパク質などの栄養を多く含む濃厚飼

料も与えています（注＝穀物や粕類など複数の濃厚飼料を混ぜ合わせたものを「配合飼料」と呼ぶ）。

日本の飼料自給率は低く、濃厚飼料の9割は外国産。原材料のトウモロコシや大豆などは、圧倒的に遺伝子組み換え（GM）作物が多いのが実態です。

高橋さんは、外国産のGM穀物を原材料にした配合飼料を使っていません。7年ほど前に、GM大豆を栽培するアルゼンチンで散布されている、農薬が原因とみられる深刻な健康被害をテーマにしたドキュメンタリー作品を観たことが転換のきっかけでした。

2018年には、牧場として「Non-GMO プロジェクト」に着手。非遺伝子組み換えの配合飼料に切り換える一方で、北海道産の子実コーンも取り入れてきました。今では、自分の牧場で生産した粗飼料と国産のNon-GM配合飼料を給与。21年には、放牧地の有機JAS飼料認証も取得しています。

また、GM作物とセットで使われる除草剤「ラウンドアップ」の危険性について、高橋さんは地元の農業関係者に問題提起を続けてきました。こうした取り組みに対し、消費者から共感する声も届いています。

2020年には、既設のD型倉庫を出入り自由な「フリーバーン方式」の育

※高橋牧場
北海道別海町中西別 179-9 ☎ 090-7519-8509



倉庫を改造しフリーバーン方式の育成舎にした

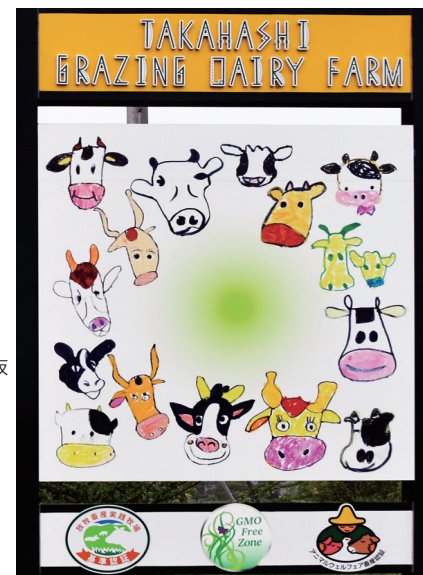
成舎に改造するなど、AWのレベルを高める努力も惜しみません。

放牧で発揮できる牛本来の力

「この子（牛）たちはすごい！人が食べられない草を食べて大きくなり、人が食べられる牛乳や肉に変えてくれる。草地に糞尿を戻すと土壌の有機物が増え、それらを分解するため生物多様性が生まれる。放牧すると牛本来の力を発揮してくれます」（高橋さん）

風景がきれい、生産工程が正しい、作られたものが美味しい、牛との共同作業が楽しい——この4つが「アニマルウェルフェア+放牧」の良さと力説し、実践は続きます。（滝川 康治）

牧場の看板



牧場主の高橋正明さんと放牧中の牛たち

大地と共存する放牧養豚の営み

十勝しんむら牧場



75haの草地で120頭ほどの乳牛を飼養する「十勝しんむら牧場」は、2015年から新たに放牧養豚を始めました。豚たちは、本来の習性を発揮しながら、1年じゅう広大な山林で暮らし、生態系の一部になっています。

放牧酪農、につづく分野へ

「十勝しんむら牧場」の酪農は、1933(昭和8)年に富山県から上士幌に入植した初代が、その数年後に乳牛を導入したのが始まりです。

「動物本来の生態に近づけることで、牛を牛らしく健康的に飼える。環境に負荷をかけず、生産物を直接販売して価格の決定権を持ちたい」

と、90年代半ばに就農した4代目の新村浩隆さん(1971年生まれ)は、舎飼いから放牧酪農へ転換。2000年には国産初の「ミルクジャム」の開発に成功し、牛乳や乳製品の製造・販売事業も手がけています。そうした中で、「牛だけでなく、馬や豚、山羊なども



暮らせる牧場を創ろう」と考え、養豚場の見学や勉強会を重ねました。

そして2015年、恵庭市内にある農業と環境のコミュニティ「えこりん村」から、生後1年の三元豚3頭を導入したのが放牧養豚の始まりです。

豚も森の生態系のひとつ

「豚はもともとイノシシなので、牧草地ではなく、山で飼ってこそ魅力がある。牧場の独自性を打ち出し、豚が本来持っている能力を引き出せないか」

と模索し、牛を入れても使いにくく、機械作業のできない未利用地に放牧することにしました。

ブランド名は「^{やまもりのぶた}山森野豚」。放牧された豚たちは、草や笹、木の根、穀物をメインにしたペレット状の飼料などを食べて育ちます。木の根元で分娩して子育てしたり、飼料を食べ終わると森の中に消えていく、寝る時は鼻で穴を掘り横たわる——豚の習性や生理・生態に合う、満たされて生きる姿が見られます。

見学会(21年7月開催)の時には、豚は雄1頭、雌65頭に増え、山羊や馬も一緒に放牧されていました。多くの養豚場では生後6カ月ほどで出荷しますが、ここでは1~2年間かけて飼

山林に放牧されている豚たち

育。「山森野豚」の肉をハンバーグやソーセージに加工・販売するなど、牛



新村浩隆さんから放牧の説明を聴く
見学会の参加者(21年7月)

乳・乳製品と併せた畜産経営の可能性を追求しています。(滝川 康治)



体温調節などのため泥だらけになり
樹木に体を擦りつけて身繕い

「遊」運営スタッフの感想から

動物が動物らしく幸せそうに過ごしている姿は、いつ見ても感動的です。広い牧草地では牛がのびのびと草を食べながら歩き、森の中では豚が仲間と時に走り、お互い声を掛け、泥の中で身体を冷やし、思い思いに過ごしていました。

動物の健康な身体づくりは土づくりから。栄養価の高い牧草をたくさん食べているお母さん牛の糞は全くの無臭!それがまた土に還り、豊かな土壌をつくります。

豚ちゃんは歯も尻尾も切られることなく、この環境でゆっくりと育ちます。そして、ワクチンに頼らない。免疫を上げるにはストレスを減らすこと、健康な食事と運動、あらためて人間と同じだと思いました。(瀬川 綾子)

森の中で育つ豚たちは、木で体を掻いたり、土を掘って必要な栄養をとったり、泥を体に塗りたいくったり(体温調節、寄生虫対策を自分でする)、自由に暮らしていた。

頭数に対しての面積も十分過ぎるほど広く、すばらしい環境だ。豚もこの森の生態系の一部なのだと感じた。

ちなみに、現在の養豚のシステムでは、妊娠している母豚は体ギリギリのスペースの檻に入れられ、餌と水を口にする以外やることができないような飼育方法が主流だ(ストレスから檻を噛む豚もいる)。2018年時点で日本の約90%がこの方法を取り入れている。

(菊地 純子)

(有)十勝しんむら牧場

北海道士幌町上音更西1線261

☎ 01564-2-3923

H P <https://milkjam.net/>

鶏の飼育環境を改善して長く飼う

The 北海道ファーム



出入り自由の鶏舎と道産飼料で

「The 北海道ファーム」はもともと千葉県で葬祭会社。香典返し用のお米の栽培を栗山町で始めたところ、結構な量のくず米が出ることが判明。それを使って何かできないかと、養鶏を始めことにした。ここでは採卵鶏を育てている。

夏は一坪あたりに1羽！冬でも同4羽！という自由すぎる環境で鶏たちは伸び伸びと暮らしている（多くの採卵鶏は羽を広げることもできないようなスペースで飼育されている）。

鶏舎の中もかなり広いフリースペースを設けているが、外には放牧場があり、鶏たちは自由に内と外を行き来できる。暑いと外に出たがらず、日陰や鶏舎に入ってくるという。一口に「放牧」と言っても、暑さを凌げないなど過酷な環境で動物が辛そうな場

面も見かけるので、自由に選べるのは最高だ。

餌はほぼ北海道産。くず米や米ぬか、水産加工場から出てくる牡蠣殻、魚粉などを無駄なく食べさせている。「すべて道産」と言い切れないのは、ビタミンなどのサプリを与えているから。あげていない時に鶏の状態がよくなかったとのこと。餌だけでは補えないものを足している、という感じだ。

餌にこだわっても、鶏の健康状態が悪ければ本末転倒で、個人的には「全て自然のものだからOK！」とは思わない。鶏のためにも、こんな風に足りないものは補えばいいのではないか。

群れの安定にオスが同居

ワクチンは打たないけれど、病気の発生は特にないという。これだけ十分なスペースがあり、フレッシュな空気が流れ、太陽の光を浴びることができる環境では、よほどのことがない限り健康だろうなあ、と鶏たちを観ながらしみじみ思った。

群れの状態を安定させるために、メス100羽に対して1～3羽入れているオスは、いつも周りに目を配っている。「なんてカッコいいんだ！」と惚れ惚れした。その佇まいも素敵だ。

オスの鶏も入れて群れの安定を保つ

床には稲藁が分厚く敷かれていて、毎年どんどん補充していく。何年分も積み重なっている状態で、そこには糞尿もあるはずなのだが、嫌な臭いはなかった。

改善したい運搬・屠殺の方法

代表の栗原直樹さんのお話で印象的だったのが、卵を産む役目を終え「廃鶏」になる時のことだ。カゴに詰めて鶏たちを業者のところに持って行き、置いてくるのがとても辛い作業で、その時期は従業員も口数が減るという。

農場の外に家畜を出すときは、辛い気持ちになる方が少なくない。そのような感情になるのは自然なことだ。少しでもそういう気持ちを和らげるには、家畜たちが不安や恐怖や痛みをできるだけ感じないように、運搬や屠畜



道産飼料を食べて育った鶏の卵



夏場は鶏舎と放牧場を自由に行き来できる

の方法を改善していくことも重要ではないか。

採卵鶏は一般的に1年半から2年で短い生涯を終える。しかし、「The 北海道ファーム」では、3年もしくはそれ以上を目指している。

農場を見学して感じたことは、栗原さんたちが鶏に対して愛情を持って向き合っているということだ。

大事に思い、観察し、向き合って改善していくことは、鶏のためにはもちろん、農場経営やそこで働く人にそのまま返ってくる。ハッピーな循環に乗ってしまえば、畜産業界で働く人の心身のストレスもだいぶ減るんじゃないか。

「命」を扱う仕事だから心が揺さぶられる場面は少なくない。最後まで命を命として考え、動物と人が苦しむことを減らしたい。（菊地 純子）

※ The 北海道ファーム

北海道栗山町字旭台 168 - 63

☎ 0123-72-2422

H P : thehokkaido-farm.co.jp/

伴侶動物と畜産動物の架け橋に

「新潟動物ネットワーク（NDN）」代表 岡田 朋子



新潟動物ネットワーク（NDN）は、犬猫の里親探しを軸にした動物愛護団体ですが、伴侶動物から畜産動物へと活動を広げてきました。誰でも安心して、この「難しい」テーマに関わることができる、というメッセージをお送りします。

小さな愛護活動からスタート

私が動物愛護活動を始めたきっかけは、今から30年ほど前に東京の地球生物会議（ALIVE）という動物保護団体が作った、「動物園の動物は幸せなの？」という1枚のチラシです。それまで動物の立場になって考えたことがなかったので、大きな気づきをもらいました。「犬抑留所」に足を運ぶようになり、多くの犬や猫が殺処分されていることに衝撃を受けました。当時、新潟県では年間1万ほどの犬や猫が収容され、



私たちが創った「猫の手募金」のきっかけになった多頭飼育の現場（2007年、新潟市内）

その多くが殺処分されていたのです。

一人ひとりができること、やりたいことを実現する場として、2001年にNDNを立ち上げました。問題は山積みで、気は焦るものの何をしたら良いのかさっぱりわかりません。1匹の命を救うこともできず、最初は保健所に古毛布を届けることから始めました。冷暖房設備のない施設では、寒さが理由で亡くなる犬や猫もいたのです。

たとえ殺処分される命でも、少しでも不安なく過ごして欲しい。活動の始まりは、ささやかな動物福祉でした。

収容される動物たちを見ているうちに、社会の問題が見えてきました。

犬や猫の里親探しをする中で、野良猫の繁殖制限への理解が進んでいないために、多くの子猫が生まれていることを知り、会で助成金制度を作って手術費用の補助を始めました。

そのうち、子どもたちへの教育が大切だと気づき、学校訪問をスタート。不幸な過去を持つ犬や猫を連れて行き、どうしたら良いかを考えてもらいます。中越地震や東日本大震災では、ペット防災にも取り組みました。徐々に社会は変化し、社会の一員として保護犬や保護猫を迎える気風が醸成されていきました。

「ペットだけが大切な？」

長く活動するうちに、少しずつ、私の中に「ペットだけが大切な？」と、モヤモヤする気持ちが膨らみ、そんな時に、ある本をプレゼントされました。タイトルは「仕切られた動物観を超えて」。実験動物、展示動物、畜産動物、伴侶動物、野生動物の各分野で活躍する方のシンポジウムをまとめたもので、どれも暮らしに深く関わり、区別しているのは人間自身だという気づきになりました。

活動の幅を広げるために、2021年に会の中に「アニマルウェルフェア班」



を立ち上げます。移動ふれあい動物園への問題提起や、動物展示施設のボランティア、アニマルウェルフェアに配慮した畜産農家を見学したり、屠畜に関する仕組みを学んだり……。そのうち、いろいろなことが見えてきました。さっぽろ自由学校「遊」のオンライン講座に参加するようになったのもこの頃です。

犬猫と違い、畜産動物は1頭の命を救うことでは問題は解決しません。で

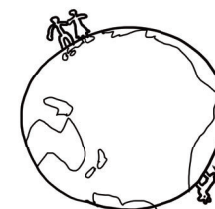


は、何ができるのでしょうか。学ぶうちに、まず私自身に変化がありました。肉や魚をどれくらい摂るのか、摂らないのか？適正な価格とは何か？卵1個70円が本当に高いのか……。

食の楽しみ方も変わりました。できるだけ動物たちの犠牲が少なく、環境に負荷をかけないことが豊かな食生活だと考えるようになったのです。

地球温暖化と食の問題や、地球の反対側で起きていることが、目の前の食につながることもわかってきました。未来への責任の中で自分の食をどう考えるか。これは、苦しみではなく、大いなる楽しみです。

学校訪問活動では新しいプログラムを作りました。子どもにもわかりやす





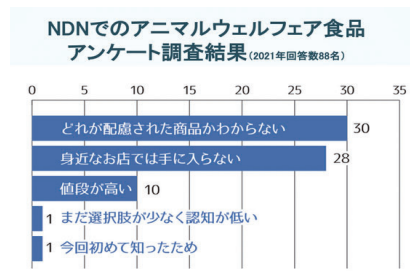
NDNが作成したアニマルウェルフェアのリーフレットより

く学べるリーフレットも作成。かわいらしいイラストで「5つの自由」を描き、犬や猫と牛や鶏が手を繋ぎ、私たちのまわりにはたくさんの命があり、支えられていることを伝えようと思いました。

アニマルウェルフェアに配慮された畜産品を揃えたスターターセットの販売も行ない、大きな評判となりました。日頃から動物愛護に関心が深い方は、きっかけさえあれば大きな理解者になります。

「持続可能な社会」という大きな課題に向き合うために、エシカル（倫理的）消費やオーガニック（有機）、ア

ニマルウェルフェアといったキーワードに配慮した商品を扱うマルシェも開催しています。犬や猫のかわいらしい商品のすぐ隣には平飼いの卵が売られています。どちらも同じ命であることの気づきになれば、と願っています。



「動物愛護」と「動物福祉」の融合を

アニマルウェルフェアを学ぶ際、よく耳にするのは、動物愛護と動物福祉の違いです。しかし、NDNの活動をしていると、行き着くところは同じように感じます。

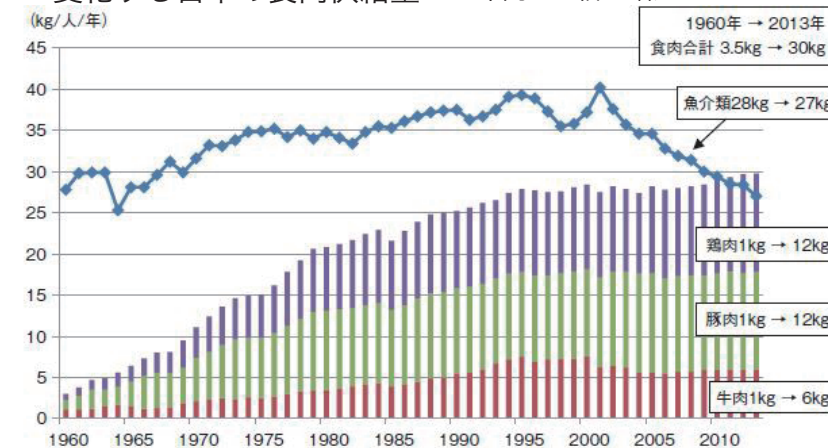
動物愛護活動では、かわいそうな命、不幸な命を減らしたいという「殺処分ゼロ」に向けての取り組みがあります。しかし、実際にはそれが全てではありません。野良猫や多頭飼育崩壊など、生きていても福祉が守られていない問題に活動はシフトしつつあります。「動物愛護管理法」の改正（2021年施行）

では、ブリーダー（繁殖業者）の飼養管理にもさまざまな数値規制が盛り込まれました。

法律の対象になっている畜産動物に対しても、「愛する気持ち」が根底にあるからこそ、動物福祉の必要性を論じることができるでしょう。そうでなければ、単なる「科学」で終わってしまいそうです。

私たちは、もっと気軽に、当事者として、「食としての命」に向き合うことができると思います。そのためには、目の前の一歩から。自分自身ができることを、是非、始めてみてはいかがでしょうか。

変化する日本の食肉供給量 50年間で9倍に増加



資料：農林水産省「食料需給表」

注：重量は純食料ベース

出典：農畜産業振興機構 HP

※新潟動物ネットワーク（事務局：新潟市東区北葉町 13-4）

TEL：090-2844-4881（10時～17時）HP <http://ndn2001.com/>

実験動物のウェルフェアをめぐる課題



動物実験の歴史をたどる

動物実験の始まりは古く、紀元前にまでさかのぼります。

紀元前 4 世紀、古代ギリシャの哲学者・アリストテレスが動物を解剖していたという記録が残っています。その後も、多くの学者や研究者、医師などによって、生体の仕組みを知るための動物実験が数多くなされました。

それらのほとんどが動物を生きたまま解剖する、麻酔のない状態で実験を行なうなど、非常に残酷で非人道的なものだったために多くの非難が集まり、やがて大規模な動物実験反対運動へと発展していきました。

これを受け、研究者たちの中でも動物福祉の重要性が求められ、「福祉的なガイドラインを取り入れるべきだ」などの声が高まるようになりました。

1959 年にラッセル（Russel）とバーチ（Burch）によって「動物実験の 3 R の原則」が提唱されました。代替（Replacement）、削減（Reduction）、洗練（Refinement）から構成され、多くの国において動物実験に関する法律やガイドラインなどに反映されています（表 1 を参照）。

日本では、「動物の愛護及び管理に関する法律」（動物愛護管理法）の第 41 条に明記され、動物実験に携わる者は法的にも道徳的にも遵守すべき内容として義務化されています。

表 1 動物実験の「3 R の原則」

Replacement（代替）：可能な限り動物を使用しない実験方法に置き換えること	
例）	意識・感覚のない低位の動物種に変更すること 試験管や培養器でのヒトや動物などの体の組織を用いた実験（in vitro） コンピューターによるシミュレーションなどへの変更など
Reduction（削減）：可能な限り実験に利用される動物の数を少なくすること	
例）	実験に使用する動物の数を実際に必要最小限にすること
Refinement（苦痛の軽減）：可能な限り動物に苦痛を与えないこと	
例）	実験における苦痛やストレスの軽減、安楽死措置、飼育環境の改善など

実験分野と使用される動物は？

動物実験は、病気の新規治療法の解明、化粧品や日用品の安全性試験、教育現場における解剖や外科などの実習など、幅広い分野で行なわれています。

実験に使用される動物は、マウス、ラット、モルモット、ウサギ、イヌ、サル、ブタなど多岐にわたります。特にヒトに近い遺伝子を持つサルは、カニクイザルなどその種類も豊富です。哺乳動物だけではなく、カイコやハエなどの昆虫、ホヤやイカなどの海洋動物も用いられます。

立ち遅れる日本の規制

「3 R の原則」をもとに、欧米では実験動物の規制を定めた法律が多く制定されていますが、日本では立ち遅れているのが現状です。

欧米では動物実験を行なう研究者は免許や登録を必須としていますが、日本にはそのような制度がありません。また、欧米では動物実験施設などの登録・届け出が必要ですが、日本は自主管理に任せています。さらに、欧米では法律に違反した者に対する罰則がありますが、日本には罰則規定は存在しません（表 2）。



2000 年代前半までの大学教育における動物実験の授業や実習は、学部などによっては必ず学ばなければならなかったものでした。しかし、動物福祉に関する授業は、実験動物学等の授業内容の一部として 1 時間程度組み込まれているか否かであり、長い時間を割いてまで学ぶ機会はほとんどありませんでした。

けれども、近年では、特に獣医学部

表 2 国内外の動物実験に関する法律の有無

	EU	アメリカ	韓国	日本
施設の登録	必要（もしくは認可）	必要	必要	必要なし
査察	あり（抜き打ち）	あり（年 1 回以上）	あり	なし
罰則	あり	あり	あり	なし

において「動物福祉学」や「動物倫理学」という名目で、ひとつの授業として確立し、動物福祉について適切な教育を受けるようになってきました。ただ、これは一部に限られており、動物を扱う全ての教育機関で実施されているわけではありません。

アメリカやカナダの医学関連の学校(211校)では、生体実習は既に廃止されています。日本でも、実験動物の利用について、実践力を付けるための臨床実習に力を入れ、生体実習については映像教材や精巧な模型などの代替手段を最大限使い、実験動物の使用の削減・廃止をする必要があります。

研究機関での動物福祉

研究機関で動物実験に従事する場合、必要な教育訓練の受講、従事者としての登録、実験計画書の作成と申請が必要です。計画書には、実験の目的や方法、使用動物数などについて明確に記載しなければなりません。「方法が残酷」「動物の数が必要以上に多い」など適切でない場合は、再提出の指示を受けます。しかし、それは研究機関内部での評価にとどまり、第三者の査察がないため、評価基準が一定ではないという問題があります。

そして、実験によって新しい成果が出た場合、国内外を問わず学術雑誌などに論文の形で研究成果を報告してい

ます。

その際、必要以上に動物の苦痛を伴う実験であるなど不適切な場合は、当該論文は返却され、どんなにヒトの利益になる実験であっても研究成果は白紙になることがあります。

特に、日本よりも海外の方がアニマルウェルフェアに対する意識が高いため、論文審査は厳しく、非人道的な実験の場合は論文そのものが受理されません。

実験動物に携わる研究者は、命を犠牲にして貴重なデータを与えてくれる動物たちに対して謝罪と感謝の気持ちを持って接する必要があります。「研究のためだから…」と無闇やたらにやれるものではありません。

日本でも、実験動物に対するアニマルウェルフェアの考え方は徐々に浸透してきていますが、動物の管理はそれぞれの研究機関に一任されているため、全てが適切に行なわれているか否か、非常に疑わしいのが現状です。

私は、日本でもアニマルウェルフェアが十分に浸透し、実験動物の扱いがより適切になれば良いと考えています。(徳光 綾子・〔一社〕アニマルウェルフェア畜産協会 会員)

〈参考文献〉

池本卯典ほか『獣医倫理・動物福祉学』
(緑書房・2013年)
上野吉一、武田庄平『動物福祉の現在』
(農林統計出版・2015年)

動物実験の闇に迫る渾身の一冊



辛い事実にも向き合う

日本の大学受験における獣医学部の志願倍率は毎年高い。それだけ動物のお医者さんに憧れる学生が多いからだ。ただ、はっきり言って日本の獣医学部はそれほど美しい所ではない。実習の中に数多くの動物実験が存在することが一要因である。

では、どのような動物実験が行われているのだろうか？ 時事通信社編集委員の森映子さんの著書『犬が殺される——動物実験の闇を探る』には、大学の名前を公表し、実験の実態を詳細に述べている。実験中に動物が置かれている状況や、終了後の処分方法なども記載されており、その中身は酷い。

これらは全て取材で得られた貴重な証言で、氷山の一角であると思う。対応した大学ですらここまで悲惨なのだから、取材を断った所ではどのような現状なのか考えるのも恐ろしい。

クラウドファンディングで精巧な海外製の動物模型を購入し、注射や麻酔、妊娠の判断などの練習に使いながら、実験動物の使用の廃止、数の削減に取り組む大学も紹介されているものの、この本は目を背けたくなる内容が多に多い。

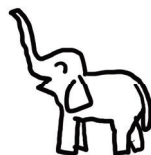
しかし、現状を理解することは大切であり、無知な状態で否定は出来ない。読む方も辛いものだから、取材をして現実を知った森さんはもっと辛かっただろう。そのような努力を無駄にしないためにも、しっかりと事実と向き合わなければならないと思う。

本書に出てくる犬など実験動物の扱いについては、森さんが講談社の「現代ビジネス」のサイトに一部分だけ記事を書いている(gendai.media/list/author/eikomori)。この記事は、環境省が獣医学部のある全17大学に実験動物の扱いについてアンケート調査をするきっかけになったという。

ある程度の覚悟を決めて獣医学部に入学するものの、その状況に幻滅する学生は少なくない。そうした学生の正直な感想も掲載されており、大変参考になる。動物を使った授業や実習に対して疑問を持つことが必ずしも間違いでないと勇気づけられる本でもある。

(徳光 綾子)

展示動物のウェルフェアをめぐるって



動物園の歴史と領域モデル

世界初の本格的な動物園は 1828 年に設立されたロンドン動物園になります。その後、欧米の各都市で多くの動物園が開設されますが、狭い檻の中に動物を閉じ込めて見世物にするような展示方法がとられていました。

アニマルウェルフェア（動物福祉・AW）には「5つの自由」、実験動物には「3つのR」の基本原則（40 ページ表1 参照）があります。

展示動物の分野では近年、「5つの領域モデル（Five domains model）」の動物福祉戦略が重要視されていま

す。世界動物園水族館協会が「5つの自由」を発展させたもので、栄養・環境・健康・行動・精神の5つの領域をもとに、動物にとって生きる価値のある生活の実現を目指すものです。

ここでの良好な動物福祉とは、「正の経験が増え、負の経験が可能な限り無い状態」です。例えば、栄養が過不足なく行き届いた状態で、環境はその場に適切なものであり、病気やケガがなく、動物本来の行動を自由に表現することができ、痛みや不安などがなく、安心かつ満足している状態のことをいいます（図1を参照）。

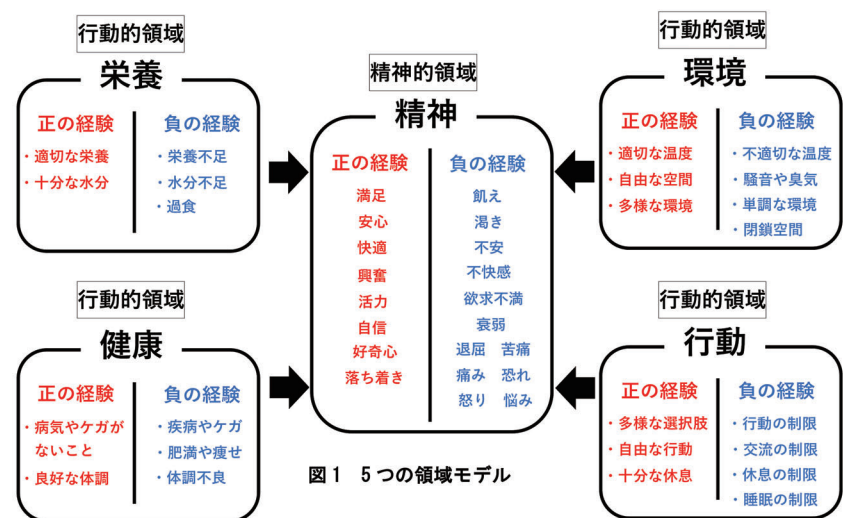


図1. アニマルウェルフェアの国際原則を発展させた「5つの領域モデル」

現代の動物園の役割とは

まず、動物を鑑賞する中で「命の大切さ」を感じてもらい、動物愛護の精神を育てる「レクリエーション」の役割があります。

ふたつ目は、生きている動物を見たり、鳴き声を聞くなどの体験をすることで、その生態や行動、自然環境について学び、知識を得る機会を提供する「教育」の役割です。

動物の行動を飼育員が注意深く観察することで、その生態や繁殖に関する調査・研究を行ない、科学的データを獲得「調査・研究」の役割もあります。

さらに、動物が繁殖できるよう努め、特に絶滅の危機に瀕した野生動物の保護に貢献する、「種の保全（保存）」役割を持っているのです。

環境エンリッチメントの試み

日本の動物園はこれまで、動物を狭い檻に収容して公開する「形態展示」が主流でした。

しかし近年、そこに動物福祉の考え方を取り入れる動きが盛んになっています。野生動物本来の多様な行動や能力を引き出し、来園者が観察できるよう工夫した、「行動展示」に注目が集まっているのです。



円山動物園での「環境エンリッチメント」の一例。
2020年、NPO法人市民ZOOネットワークが実施する「エンリッチメント大賞」を受賞した。



「ハズバンドリートレーニング」の一環で行なわれているカバの口腔内検査

飼育環境に様々な工夫を凝らし、動物の持っている能力を発揮させることで、本来の習性に基づく幸福で豊かな暮らしを実現するための試みを「環境エンリッチメント」といいます。

例えば、わざわざ高い所に設置したゾウの餌を長い鼻を使って頭上でつかみ取るなど、野生本来の採食方法に近づけるやり方を試んでいます。同種および異種動物と同居することで、別の個体からの臭いや鳴き声によって五感が刺激されるよう促す、といった方法も試行されています。

ハズバンドリートレーニングとは

新たな取り組みとして、動物の協力を得つつ検査や治療、健康管理を行なうという「ハズバンドリートレーニング」（受診動作訓練）があります。

オランウータンの口腔内（歯科）検査や採血、妊娠した際の腹部エコー検査をする際、昔は麻酔などが必要でした。しかし今は、前もって採血などの

訓練を行ない、検査に慣れさせておくことで、本番でも落ち着いた状態で検査ができるようになったのです。

危険な動物であっても麻酔なしで検査や治療が可能になり、ストレスを大幅に軽減できるメリットがあります。わずか 20 年前には全て麻酔に頼っていたものが、今では無麻酔で健康管理を行ない、動物の負担を軽減できるようになりました。

さらなる AW の向上を

海外とりわけ欧米の動物福祉の歴史は長く、展示動物の分野も例外ではありません。福祉向上の意識が高く、技術も日本より大幅に進んでいます。

外国人が日本の動物園を訪れた際、狭い檻に閉じ込めるような展示方法を嘆いたり、疑問を持つことは少なくありません。「種の保全」などの取り組みを国際的に広げていくには、動物福祉のさらなる向上が必要です。

日本でも近年、AW に配慮した動物園が増えていますが、入園者側から見ると、心配な点があります。

公立の動物園の場合、ほとんどの飼育員は地方公務員です。動物園に配属される前は土木課などに所属しており、数年後には別の部署に異動予定の飼育員の話が、あるテレビ番組で放映されました。行動展示で有名になる前の旭川市旭山動物園での話です。

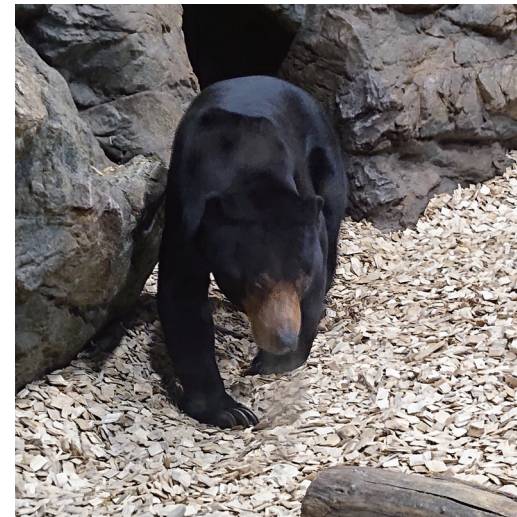
私は、動物が好きで専門的知識も十分な人が飼育員になるべきだと考えています。それは、AW を実現する必要不可欠な要素であり、動物のためにもなるからです。

希少動物の種の保存のため、動物園の間で移動が頻繁に行なわれています。しかし、親子や仲のいい個体同士の場合、急に離れ離れにすることがストレスにならないのでしょうか。希少動物の個体数を増やすことも大切ですが、ストレスにならない飼育環境作りが AW の必須項目であることを忘れてはいけません。

以前、私の地元の札幌市円山動物園で、年老いた雌と若い雄のマレーグマとの同居訓練において、若い雄から襲われた雌が死亡するという痛ましい事故が起きました。事故後、道内外から多くの厳しい意見が殺到し、信頼回復にかなりの時間を費やしたようです。

このような試みは、他の動物園でも頻繁に行なわれています。

旭山動物園では昨年、雄と雌のつが



円山動物園では同居訓練の中でマレーグマの死亡事故が起き、批判が殺到したこともある

いのライオンとその子どもたちの同居が試みられました。こうした訓練が成功すると称賛され、失敗した場合は非難を受ける…。動物園はなかなか厳しい立場にあります。痛ましい事故を回避するには、過去の資料や経験を生かし、万全の態勢で臨むべきです。

動物の行動の予測が難しいことは言うまでもありません。アニマルウェルフェアの向上のために、動物園側は努力を重ねてほしいものです。

（徳光 綾子）

飼育動物が死亡した時に設けられた祭壇。道内外の市民から多くの花や供物が届いた（円山動物園）



絶滅の危機にある野生動物との共生

猛禽類医学研究所 代表 齊藤 慶輔



「環境治療」を活動の基軸に

私たちは、傷ついた野生動物を治すだけでなく、長年の人間活動で病んだ生態系や自然環境を健全で安全なものへ治していく取り組みを「環境治療」と名づけ、活動の基軸にしています。

環境省釧路湿原野生生物保護センターに収容された、猛禽類の負傷・死亡原因で常に大きな割合を占めるのは、車両や列車との衝突事故です。

搬入されたワシの多くが吐き出すペレット（吐瀉物）から、大量のエゾシカの体毛が検出されることが多く、事故に遭う直前に放置されたシカの轢死体や狩猟残滓を食べていた、と推察しています。また、シマフクロウの多くが一般の道路上で事故に遭っており、上半身を損傷し、体内から未消化のエゾアカガエルが検出されました。

これらの交通事故に対し、ドライ

バーへの注意喚起や、道路管理者による障害物（ポールなど）の設置にも協力してきました。

送電線設備による感電事故も深刻な問題です。北海道電力による感電防止器具（バードチェッカー）の開発に協力してきましたが、電気設備や被害鳥から得られる様々な情報をもとに、事故の状況や発生場所、通電部位などを把握することは、再発防止策を考える上で重要な手掛かりになります。

風力発電は野鳥に対し、風車ブレードとの衝突事故（バードストライク）や行動生態の攪乱、施設建設に伴う生息地の消失などの影響を与えています。バードストライクの発生状況を正確に把握するためのシステム構築や、事故の予防策の検討が重要です。

1990年代後半より、北海道では猛禽類の鉛中毒死が相次ぎ、社会問題になっています。道は、2000年度の猟期からエゾシカ猟での鉛ライフル弾の使用規制を開始。04年度からは、すべての大型獣の狩猟ですべての鉛弾が使用禁止になりました。さらに、14年度からは、エゾシカ猟時の鉛弾所持も条例で禁止されています。

しかし、これはあくまで道内のみの規制であり、全国規模での法的な規制

オオワシの治療に取り組む齊藤代表（右）と研究所のスタッフ



は存在しません。そこで、25年度から全国で鉛弾の使用を段階的に規制し、30年度までに野生鳥類の鉛中毒ゼロになることを目標にしています。

終生飼育の猛禽類が活躍

無事に野生に復帰できるのは一部の幸運な猛禽類ですが、私たちが後遺症などで復帰できない個体にも活躍の場を設けることで、快適な余生を送ってほしい、と願っています。

まだ自力で餌を摂れないオジロワシの雛を保護した事例もあります。終生飼育中の雌の成鳥が、この雛に給餌をしたのです。オジロワシの幼鳥が継母に育てられる、初めての試みでした。

感電事故を防ぐバードチェッカーの開発にも、終生飼育の猛禽類が活躍しています。有用性が確認されたものが、道内約2千カ所の送・配電柱で採用されているのです。また、狩猟に伴う鉛中毒の治療の際、血中の鉛濃度を低下させるための輸血用のドナーにも終生飼育の個体が活躍しています。

このような終生飼育を推進するための費用は、環境省からは支給されていません。クラウドファンディングなどの寄付金や、グッズの販売による収益、執筆活動などから得ています。

【連絡先】 猛禽類医学研究所

北海道釧路市北斗2-2101 環境省 釧路湿原野生生物保護センター内
☎ 0154-56-3465 H P : <http://www.irbj.net/index.html>

義嘴づくりや鳥インフル治療も

2019年、交通事故により上嘴（し）と左眼を失ったオジロワシの義嘴の作成を試みることにになり、歯科医師らを含めた専門チームを結成しました。2年後には軽くて丈夫なアクリル製の義嘴が完成し、今では自力で採餌や羽繕いをするようになっています。

また、昨シーズンは鳥インフルエンザに感染したオジロワシ10羽の治療を試み、うち7羽の救命に成功しました。これは、世界で初めて鳥インフルエンザの治療に成功した事例です。

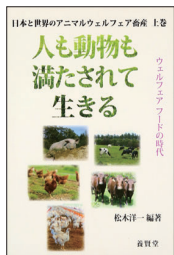
（まとめ・徳光 綾子）

（さいとう けいすけ）日本獣医畜産大学卒業。1994年より釧路湿原野生生物保護センターで野生動物専門の獣医師として活動開始。2005年に「猛禽類医学研究所」を設立。絶滅の危機に瀕した猛禽類の救護や環境治療などに取り組む。著書『野生の猛禽を診る』（北海道新聞社）など。



アニマルウェルフェアを学ぶための読書案内

松木 洋一 編著『日本と世界のアニマルウェルフェア畜産<上巻>
— 人も動物も満たされて生きる』



養賢堂
2016年 1,980円

「人間と家畜が相互依存する共生システム」をめざす中で、みずからの生き方を充実させてきたモデル的な農場を紹介。北海道から山口県まで10事例（牛、豚、鶏）の取り組みは、欧米の先進的なAW畜産にも引けを取らないことがよく分かる。

松木 洋一 編著『日本と世界のアニマルウェルフェア畜産<下巻>
— 21世紀の畜産革命』



養賢堂
2018年 3,960円

工場型の畜産システムからAW畜産への転換をはかる海外の動向を踏まえ、日本における課題を取り上げた。20数名の専門家が執筆し、畜産動物の生産者から食品企業、消費者に至るフードチェーンの開発実態や、そこで展開される論理を分析している。

佐藤 衆介『アニマルウェルフェア
— 動物の幸せについての科学と倫理』



東京大学出版会
2005年 3,080円

著者は動物行動学の研究者。「動物の幸せ」のレベルは科学的に捉えられ、それを高めることが倫理である — と本書の狙いを記す。EU（欧州連合）でのAWの経緯をたどり、「動物への配慮」をめぐる歴史や、人間の本质について深掘りした必読の入門書。

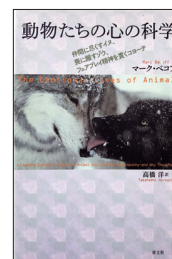
生田 武志『いのちへの礼儀
— 国家・資本・家族の変容と動物たち』



筑摩書房
2019年 2,750円

「わたしたちは、人間と動物の全共同体を見渡し、動物たちの『生と死』のあり方をあらためてみつめる必要があります。そして、そこに現れる動物たちの声に応答し続ける責任があります」（本文より）。人類史を振り返り、肉食に対する態度を問う評論集。

マーク・ベコフ『動物たちの心の科学』



青土社
2014年 2,640円

著者は米国の動物行動学者。ここ数十年の動物の情動（喜怒哀楽など）をめぐる研究の深化について紹介。仲間に尽くす犬、喪に服すゾウなど多くの例をもとに、どの動物もヒトと同様に感覚能力を備えた存在、と指摘する。AWの改善にとって示唆に富む一冊。

ピーターシンガー『動物の解放』改訂版



人文書院
2011年 4,840円
※価格はすべて税込み

豪州出身の哲学者の著者は「すべての動物は平等」「工場畜産を打倒せよ」などラジカルな主張を展開。20世紀の動物福祉論を踏まえつつ、種差別を乗り越える思想として「動物の権利（アニマルライツ）」の大切さを説く。世界のAW運動にも影響を与えてきた書。

さっぽろ自由学校「遊」 アニマルウェルフェア関連講座の軌跡

(敬称略・肩書は開催当時)



【第1期】2019年10月～20年1月

◎10月5日 〈プレ企画〉公開講演会

「家畜は感受性のある生命存在だ！——
日本と世界のアニマルウェルフェア最新事情」
講師：松木 洋一（日本獣医生命科学大学名誉教授・農業経済学）

- ・10月26日 「アニマルウェルフェアって何だろう？」
滝川 康治（ルポライター）
- ・11月16日 「ペットフードの危険な原材料
ーボロボロで薬漬けにされた動物たち」
小林 宏幸（㈱克フーズ 代表取締役）
- ・12月14日 「アニマルウェルフェアって何だろう part 2」
滝川 康治（ルポライター）
- ・1月18日 「アニマルウェルフェアから見る放牧酪農の有利性」
須藤 純一（〔一社〕日本草地畜産種子協会 放牧アドバイザー）



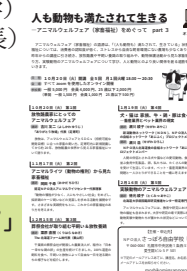
【第2期】2020年5月～9月

- ・5月30日 「生産現場で見るアニマルウェルフェアの実態」
家倉 博（獣医師）、菊地 純子（酪農ヘルパー）
- ・6月13日 「『山地酪農』とエシカル（倫理的）消費」
中洞 正（㈱企業農業研究所なかほら牧場 牧場長）
- ・7月18日 「動物たちのためにあなたができること——
保護活動からみたアニマルウェルフェア」
瀬川 綾子（新潟動物ネットワーク（NDN）メンバー）
瀬川 浩（NPO法人北海道食の自給ネットワークあにふくプロジェクトメンバー）
- ・8月29日 「アニマルウェルフェアと食の安全・安心——
牛乳・乳製品を中心に」
紺野 勝歳（元・雪印乳業㈱北海道総括支店お客様相談室長）

- ・9月12日 「消費者にとってのアニマルウェルフェア」
山崎 栄子（生活クラブ生協・北海道 理事長）
小池 香織（同生協 理事）

◎7月23日 「ありがとう牧場」（北海道足寄町）の見学会

- ◎8月22日 公開セミナー『『脱・ケージ』は世界の潮流——
鶏をめぐるアニマルウェルフェア最新事情』
講師：大木 茂（麻布大学獣医学部教授・農業経済学）
高森 雄輔（コープさっぽろ商品本部 食品部長）



【第3期】2020年10月～21年2月

- ・10月20日 「放牧酪農家にとってのアニマルウェルフェア」
吉川 友二（ありがとう牧場 代表）
- ・11月17日 「アニマルライツ（動物の権利）から見た家畜福祉」
岡田 千尋（NPO法人アニマルライツセンター 代表理事）
- ・12月15日 「葬祭会社が取り組む平飼い&放牧養鶏」
栗原 直樹（The 北海道ファーム 代表）
- ・1月19日 「犬・猫は家族、牛・鶏・豚は食べ物？——
畜産業界とペット業界の現実」
瀬川 綾子（新潟動物ネットワーク（NDN）メンバー）
瀬川 浩（NPO法人北海道食の自給ネットワークあにふくプロジェクトメンバー）
- ・2月16日 「実験動物のアニマルウェルフェア」
徳光 綾子（北海道大学病院臨床研究推進センター 特定専門職員）

【第4期】2021年4月～9月

- ・4月22日 「飲食店から見たアニマルウェルフェア」
石田 香織（嬉楽㈱ 代表）
- ・5月27日 「採卵鶏のアニマルウェルフェア」
森 映子（時事通信社 編集委員）
- ・6月24日 「牛はただの食材か——肉牛とアニマルウェルフェア」
比屋根 恵（石垣島比屋根牧場 代表）



- ・ 7月29日 「国會議員と考えるアニマルウェルフェア普及への道」
堀越 啓仁（衆議院議員）
- ・ 8月26日 「行政の取り組みを聞く」
叶 拓斗（北海道農政部畜産振興課 主幹）
- ・ 9月30日 「実験動物のアニマルウェルフェアを考える」
森 映子（時事通信社 編集委員）

◎ 7月17日 十勝しんむら牧場（北海道上士幌町）の見学会

◎ 9月11日 The 北海道ファーム（同栗山町）の見学会

◎ 10月9日 妹背牛牧場（妹背牛町）の見学会

【第5期】2021年10月～22年3月

- ・ 10月23日 「世界と日本のケージフリー活動と企業の動向」
上原 まほ（ザ・ヒューメイン・リーグ・ジャパンリージョナルマネージャー）
- ・ 11月27日 「放牧酪農家から見たアニマルウェルフェア」
高橋 正明（放牧酪農家の考える食と生命の会 代表）
- ・ 12月11日 「学生たちが思うアニマルウェルフェアとは」
平出 沙彩（青山学院大学「きすあに」創設者）
高野 雅（農場動物の動物福祉について考える会（TAF）代表）
- ・ 1月22日 「アニマルウェルフェアとのつながり方」
岡田 朋子（新潟動物ネットワーク（NDN）代表）
- ・ 2月26日 「動物園動物のアニマルウェルフェア」
山本 秀明（札幌市円山動物園 飼育展示課長）
- ・ 3月26日 「日本のアニマルウェルフェア普及に向けた課題」
松木 洋一（日本獣医生命科学大学 名誉教授）



【第6期】2022年4月～9月

- ・ 4月28日 「アニマルウェルフェア養鶏を追求する」
向山 一輝（農業生産法人「黒富士農場」専務取締役）
- ・ 5月26日 「『代替肉』『培養肉』と動物福祉を考える」
岡田 千尋（NPO 法人アニマルライツセンター 代表理事）
吉川 友二（ありがとう牧場 代表）
- ・ 6月23日 「北海道の酪農現場の実態から」
菊地 純子（酪農ヘルパー）、西村 紗希（牧場従業員）
- ・ 7月28日 「ヒグマからの魂のメッセージを聴く」
安藤 誠（写真家）
- ・ 8月25日 「動物権利論と動物福祉論—実験動物を中心に」
黒澤 努（鹿児島大学共同獣医学部 客員教授）
- ・ 9月22日 「家畜福祉の名著『アニマル・マシーン』入門」
滝川 康治（ルポライター）

◎ 6月11日 高橋牧場（別海町）の見学会

◎ 9月9日 小林農園 [テンアール(株)]（厚真町）の見学会



【第7期】2022年10月～23年3月

- ・ 10月13日 「産業動物獣医師としての仕事」
工藤 有沙（NOSAI 北海道宗谷南部家畜診療所 獣医師）
- ・ 11月10日 「絶滅の危機に瀕するマゲシカ問題」
立澤 史郎（北海道大学大学院文学研究院 助教）ほか
- ・ 12月8日 「絶滅の危機に瀕した猛禽類と共生するために」
齊藤 慶輔（猛禽類医学研究所 代表）
- ・ 1月12日 「ヒグマ研究第一人者よりヒグマの実像を学ぶ」
門崎 允昭（北海道野生動物研究所 所長）
- ・ 2月9日 「共生のアニマルウェルフェア—乳牛をめぐる」
石田 幸也（もっと北の国から楽農交流会 代表）
- ・ 3月9日 「『脱ケージ』を軸に鶏と人間との関係を考える」
大木 茂（麻布大学獣医学部教授）

※注＝第1期は対面講座、第2～7期はオンライン講座（見学会、セミナーなどを除く）

アニマルウェルフェアBOOK

人も動物も満たされて生きる

執 筆	岡田 朋子、菊地 純子、瀬川 綾子、滝川 康治、徳光 綾子、 比屋根 恵（50 音順・敬称略）
企画・編集協力	大木 茂、岡井 健、岡田 千尋、小泉 雅弘、寺本 千名夫、富永 宰子 松木 洋一、猛禽類医学研究所、森 映子、横山 敬子（同）
発行日	2023 年 3 月 30 日
著 者	NPO法人さっぽろ自由学校「遊」アニマルウェルフェア研究会
編 集	滝川 康治
装画・挿絵	尾潟 鉦一
デザイン	オガタコデザイン
発 行	NPO法人さっぽろ自由学校「遊」 〒060-0061 札幌市中央区南 1 条西 5 丁目 愛生館ビル 5 F TEL.011-252-6752（担当・滝川携帯 .090-9085-9078） FAX.011-252-6751 E-mail info@animalwelfare-school.com H P animalwelfare-school.com
助 成	C I W F（Compassion in World Farming）

©2023 Freedom School'YU'
All rights reserved.

本文・図版の転載やコピーなど自由にご活用ください。

※ご寄付・カンパ歓迎します

（郵便振替口座 02780-5-47036 自由学校「遊」まで）